291
5
574
80
上部

霊界物語

海洋萬里

申之卷

一瑞月口述

出口瑞穂日誌

陵祥萬里

元八尚社發行

〔羅界物語第三十三輯〕

大正
12.11.15
内交

國會圖書館
51. 9. 16
國會圖書館

1083038

序歌

中津御代より体主霊從の
邪さの教蔓こりて
吾等が遠津御祖たち
世人もろとも村肝の
心は清く人ながら
惡しき風習に移ろひて
異しき卑しき蕃神を
專らと齋き奉りつゝ
高く尊き天地の
嚴の御魂や瑞御魂
御幸に依りて惟神
大道の中に生れ出で
食物衣服住む家等
爲しと爲すこと事毎に
大御恵を受け乍ら
神の大道を粗略に
思ひ居る人多く出で
神に仕ふる大道は

月日と共に廢れ行き
祭れる神社も衰へて
放りて神の大稜威
所を得つゝ天地の
押し籠めおきて空蟬の
神の御國を搔き亂し
思ふの餘り大本の
能く說き明かし世の人に
深き由緒を克く諭し
造り上げんと瑞月が
天津神等國津神
皇神たちは彌放り
隱ろひ玉ひ蕃神は
大御祖神生神を
世人を欺き美はしき
汚せしことの慨しと
皇大神の御敎を
普く嚴の御惠み
尊き珍の御柱に
神の御命を畏みて

大き正しき十の年
神のまに〳〵述べ立つる
編み初めしぞ嬉しけれ
御靈幸はへまし〳〵て
信徒たちは言ふも更
奇しき消息の大略を
此の時この際信徒は
築き固めつゝ嚴御魂
敎を以ちて行く先も
異議曲論蔓り來るとも
九月の中の八日より
尊き神代の物語
ア、惟神々々
この大本に集ひ來る
普く世人に神界の
悟らせ玉へと願ぎまつる
各自靈の御柱を
瑞の御魂の說き諭す
如何なる曲神あらはれて
交らひ口會ふ事もなく

主一無適の信仰を　續けて經と緯糸の
教を信なひ玉へかし　この世の御先祖と現れませる
國常立大神は　三千年のいと長き
あいだ根底の國深く　隱ろひまして現世を
浦安國と平けく　知食さんと神議り
議り玉ひし有難さ　ア、惟神々〳〵々
御靈幸はへまし〳〵て　奇しき神代の物語
心靜めて信徒が　讀み上げ〳〵大神の
心を悟りて一日も　早く尊き大神の
柱となりて神業に　仕へて世界を泰平に
進め開かせ玉へかし　心も空しき瑞月が
眞心こめて天地の　神の御前に願ぎ奉る。

大正十一年九月十九日（舊七月廿八日）

口述者識

いさましき大和錦を脱ぎ捨てゝ
　やがては着けむ唐の錦を
唐衣着つゝ心は神國の
　綾と錦を織らんとぞ思ふ
打仰ぐ向ふの岸にたすけ船
　一つ見ゆれど頼るすべなみ

瑞月

海洋萬里【申の卷】目次

序歌……頁
瑞祥……
第一篇　誠心誠意
第一章　高論濁拙……一
第二章　灰猫婆……一五
第三章　言靈停止……二八
第四章　樂茶苦……三五
第二篇　鶴龜躍動
第五章　神壽言……五一
第六章　皮肉歌……七二

第七章　心の色……八三
第八章　春駒……九五
第九章　言靈結……一〇九
第一〇章　神歌……一二二
第一一章　波靜……一三二
第一二章　袂別……一四二

第三篇　時節到來

第一三章　歸途……一六五
第一四章　魂の洗濯……一七九
第一五章　婆論議……一九四
第一六章　暗夜の歌……二〇九
第一七章　感謝の涙……二二三
第一八章　神風淸……二三四

第四篇　理智と愛情

第一九章　報告祭……二四四
第二〇章　昔語……二六〇
第二一章　峰の雲……二七六
第二二章　高宮姫……二九三
第二三章　鐵槌……三〇八
第二四章　春秋……三二三
第二五章　琉の玉……三三七
第二六章　若の浦……三五一
【附錄】　伊豆溫泉旅行に就き訪問者人名讀込歌……三六四
湯ヶ島所感……三七七

海洋萬里(申の卷)目次終

特501.
123

海祥萬里【申の巻】〔33〕

口述者　出口瑞月

筆錄者　松村眞澄

瑞祥

今日は如何なる吉日ぞ
瑞祥閣の建てられし
天津御空は蒼々と
空をかすめて緩々と
折から出口の瑞月が
鎭まりゐます木の花の

萬代祝ふ龜岡の
名さへ目出度き萬壽苑
澄切り渡る初秋の
かけり來りし二羽の田鶴
不二の高峰に常永に
咲哉の姫の御經綸

變現出沒窮みなき
因て述ぶる物語
淨寫菩薩の松村氏
いよ〳〵樂しき休養日
瑞雄あらはす公孫樹
綾部の方を眺め居る
尊き神の開きたる
かゞやく時も北村や
手に採る如く思はれぬ
隱れ居ませし大神の

三十三相の神業に
三十三卷述べ了らて
心も加藤明けく
東尾見れば吉祥の
常磐の松に羽休め
鶴の姿ぞ勇ましき
敎の花の千載に
いや隆光る伊佐男氏は
天の岩戸の奥深く
稜威も出口の神の道

暗夜を照らす瑞月が
我大本の瑞徵を
示し玉ひしものなりと
小松の茂る神の園
五六七の御代を松虫や
機織虫の此所彼所
コーロギ虫の聲清く
照り渡る如聞えたり
御靈幸はへ坐し〳〵て
高峯の空に皇神の

歡び勇み打仰ぎ
皇大神のまつぶさに
千代萬代を壽ぎて
心も涼しき鈴虫や
經と緯との綾錦
歌へる聲はキリ〳〵ス
眞澄の鏡明けく
ア、惟神々〳〵
芽出度き田鶴の舞ふ如く
畏き敎を敷島の

大和心の隈も無く
神の御前に謹みて
九月二十日の瑞祥を
命毛の肉筆ならぬ
墨をふくませ一苦勞
神苑内の老松の
例もあらぬ事なれば
ア、惟神〳〵々々
大正十一年九日二十日

照らさせ玉へ天地の
大き正しき十一年
うれしみ畏み
万年筆の永々と
神の御爲世の爲に
枝をば垂るゝ心地よさ
後日の爲に記しおく
御靈幸はへましませよ。

口述者識

第一篇　誠

心誠意（一六四）

第一章　高論濁拙（九一六）

嚴の御靈に由緣ある
湯ケ島溫泉湯本館
連日連夜の大雨に
伊猛り狂ふ水の音
亞鉛板の屋根を轟かし
皇大神を齋りたる
安全椅子に横臥して
三十三卷物語

高論濁拙

伊豆の神國田方の郡
軒を流るゝ狩野川
水量まさり轟々と
又もや降り來る大雨に
耳さわがしき雨舘
奥の一間に瑞月が
瑞の御靈に由緣ある
完美に委曲に述べ立つる

あゝ惟神々々
待ちに待ちたる靈界の
皇大神の道の爲
教の薀奥を說き諭す
神の教は日に月に
道の柱となさしめよ
月は盈つ共缺くる共
神の言葉は何時迄も
月日と共に變らまじ
天津神達八百萬

御蔵幸はひまし〳〵て
三十の三卷の物語
世人の爲に三五の
此眞心を諾なひて
茂り榮えてどこ迄も
旭は照る共曇る共
假令大地は沈む共
天地の續く其限り
天地開けし始より
國津神達八百萬

中にも分けて國治立の
其外殊に御功績の
雲霧分けて瑞月が
松雲太夫に筆とらせ
五六七の御世の末迄も
神の御前に願ぎまつる
蒼空一點の雲影もなく、
高山の頂きを掠めて
平和の輝きを
涼しき風は

神の命の御來歷
著しきを選り集め
宇宙の外に立ち乍ら
こく物語永久に
照らさせ玉へ　惟神
神の御前に願ぎまつる。
天津日は東天に
登らせ玉ひ、
地上に投げ玉ひ、
天然の音樂を奏し、

山野の樹木は　　雀神的に競うて舞踏をなす
蝶は翩翩として　　心地よげに飛びまはり
魚は潑溂として　　清泉に躍る
げに名にし負ふ高砂島の　　瑞祥を、目の前り、
天地四方に現はしぬ、　　今日はしも神素盞嗚大神
天降り玉ひて、　　アルゼンチンの珍の神館に
出でさせ玉ひ、　　入人乙女の末の御子
末子の姫の花の春　　一度に開く木の花の
苔の上におく露も　　いとすがすがしげに見られにける。
三五教の神司　　龍の腮との球の玉

其神徳を身に受けて　　救ひの神と輝ける
國依別の神司を　　珍の都の主とし
末子の姫に娶はして　　千代に入千代に高砂の
ほまれを四方に傳へんと　　心欣々大神は
今さし昇る天津日に　　向つて兩手を合せつゝ
祈り玉ふぞ尊けれ。

愈〻結婚の式は今宵と差迫り、松若彦、捨子姫は數多の神司を始め、信徒を使役して、今夜の慶事の準備萬端に全力を注ぎ、何れも甲斐々々しく東奔西走して、喜色滿面にあらはれ、上下一致手の舞足の踏む所を知らず、吾を忘れて、大活動をなせる折柄、此慶事を少しも祝せざるのみか、体主霊從の限りを盡し來りし國依別が、瑞の御

靈の生娘、末子姫に娶ひて、清き御靈を混濁し、折角こゝ迄造り上げた高砂島の瑞祥を、黒白も分ぬ暗の夜に、覆へさんは目の前り、神の御爲、世の爲に飽く迄も、之を拒み遮り、破約せしめんと、夜叉の勢凄じく、彼方此方と駈巡り、目を釣り上げ、顏を赤らめ、口を尖らせて、運ぶ歩みも荒々しく、今夜の準備に目のまはる程、多忙をきはめ居たる松若彦が館を叩き、慌ただしく入り來るは、例の高姫さんであつた。

高姫『御免なさいませ。……私は皆さんに憎まれ者の名を取つた身魂の惡い高姫で御座います。急々お目にかゝつて申上げたい事が御座いますから、どうぞ松若彦樣に少時で宜しいから、御目に懸りたう御座ります。どうぞ御取次を願ひます』

とエライ權幕で呼ばはつてゐる。カールは此聲に表へ駈出で、

カール『これは〳〵、貴き高姫樣で御座いましたか。よくマア御入來、何の用かは存じませぬが、今日は貴女も御聞及びの通り、瑞月祥日と申しまして、アルゼンチン開けて以來、又とない結構な御日柄で御座います。御存じの通り、一片の雲影もなき青空に、天津日の大神樣は赫々として輝かせ玉ひ、夜は三五の明月、銀玉を空に懸けたる如き瑞祥の今日、イヤもう目出たうて〳〵、鶴は千年、龜は万年、東方朔は九千年、三浦の王統家五千歳、三千年の御仕組の一厘の花も開きそめ、目出たいの目出たくないのつて、何を仰有つても、今日に限つてグサ〳〵した言葉はテンと耳には這入りませぬ。御用があれば更めて明日承はりますから、どうぞ今日は早く御歸り遊ばし、貴方も御結婚の準備の御手傳に御殿へお上り下さいませ。さぞ末子姫樣が御待ちかねで御座いませうぞ!』

高姫『コレ〳〵、カール殿、お前に話さうと云つて來たのぢやない。主人の松若彦に意見をせうと思うて、來たのですよ。主人にも取次がず、潛越至極にも門前拂ひをくらはすとはチと脫線ぢやありますまいか。又此高姫に對し、早く御殿へ上り、御手傳ひをせよと仰有つたやうだが、そんな命令を下すお前さんに、ヘン、權利がありますかい。グヅ〳〵して居ると、日が暮れます。そうすりやサッパリ後の祭り、サアもうお前さんに係り合つて居つては、事が遲れる。エ、そこ退つしやれ』

カール『コレ〳〵高姫さん、貴方は强行的家宅侵入をするのですか、法律を心得てゐますかなア』

高姫『エ、小癪面をさげて、法律の糞ので、何を言うのだ。法律は死物だ。生た人間が之を使へば活きるが、お前のやうなデモ法律家が何を吐いたつて、三文の價値もありませぬぞや。それだから神樣が法律を變へるぞよと仰有るのだよ』

カール『高姫さん餘り馬鹿にして下さるな。これでも赤門出のチャキ〳〵の法學士、而も優等で出たカールさんだよ。餘り馬鹿にして貰ひますまいかい。やがて博士の稱號が下らんとしてゐる所だ』

高姫『博士が聞いて呆れますぞね。お前のは博士でなうて、バカセだ。昔はハカセとよんだが、今はバクシと讀むのだよ。讀方も知らぬやうな法學士が何になるか、法學士でなうて、方角知らずと云ふ馬鹿者だらう。薄志弱行の徒計りが集まつて居るから、今ではバクシといふのだ。白紙主義と云うて、白紙の樣な淸い精神なれば、まだしもだが、眞黑々助の濁つた魂で、法學士も博士もあつたもんかいな。法律を殺して、皆墓へ埋めるのだから、バカセと昔は云つたのだ。此頃は松若彦さんの庭

先に立つて、箒を以て庭掃かせになるとこだと云つて、威張つて居るのだらう。何程箒（法規）が立派でも、神樣の自然の憲法には抵抗することは出來ますまい。法律と云ふものは、其源を神界の憲法に發して居るのだ。其元を摑んだ大和魂の生粹の高姫に對し、何程辯護士もぐきに滔々と懸河の辯を揮つても駄目ですよ。舌端火を吐き、炎を吹いて、高姫を煙にまき、追ひ歸さうと思つても、いつかな〳〵日の出神……オツトドツコイ……火の出る樣な勢でも、只一口ジユンと水を注したら、忽ち消滅して了ふ樣な屁理窟を云ふもんぢやありませぬぞい。それだから、人間の造つた不完全な學問は駄目だと云ふのですよ。……學ありたとて、智慧ありたとて、神界の仕組は人民では分るものではないぞよ……と此世の根本を御遣り遊ばした大先祖の國治立命樣が、仰られて御座るぢやありませぬか。其大神樣の片腕となつて御手傳ひ申す身魂の云ふことを、揚げ面して聞くと云ふ樣な、不都合千萬の罰當りが、どこにありますか。エーエ、面倒臭い、家宅侵入だらうが、何だらうが、そんな事を構うてゐる暇がない、カールさん、すつこんでゐなさい！」

松若彦「ヤア貴方は高姫樣……何御用か存じませぬが、なることならば明日、どうぞ御訪ね下さいませ。万一御都合が惡ければ、私の方から明日更めて御伺ひ致す考へで御座いますから……」

高姫「間髪を容れざる危急存亡の今日の場合、そんな陽氣な事を云つて居られませぬ。何でもかんでも、お前さんが發頭人だから、こゝで一つ生命に代へても往生させねばならぬ大問題が差迫つて來て居ります。後の後悔は間に合ひませぬからなア」

松若彦「これは〳〵何の御用かと思へば、大變な急用との御話し、そんなら私も結婚の準備に付いて、何かと繁忙をきはめ、只今言依別樣の御館へ出仕する所で御座いましたが、僅五分間丈繰合せまして、御話を承はりませう」

高姫「別に五分間もかゝりませぬ。お前さんが高姫の云ふことを……ウンさうか、御尤も……と首を縦に一つふりさへすれば、それで萬事解決がつくのだ」

松若彦は言依別、國依別、龍國別より昨夜の高姫の妨害運動を早くも聞かされてゐたので、的切り、此事ならんと、早合點し、

松若彦「高姫さん……如何にも御尤も、仰有る通りに致します……ウン〳〵……」

ガクリ〳〵と首を縦にふり、

「左樣なら……」

と言つたきり、足早に裏口よりぬけ出し、言依別命の館を指して、雲を霞と逃げて行く。

高姫「コレ……松、ワ、若、ヒ、彦何をビコ〳〵としてゐるのだ。奥の間にかくれて居つても埒があきませぬぞね。……ヤッパリ氣が咎めると見えて、蒟蒻のやうにビリ〳〵ふるつて奥の間に隱れたのだな。蚤が蒲團の縫目に頭許り隱して、尻を出しとる如うな、アザとい事をしたつて駄目ですよ。今日は奥の手の、とつときの日の出神樣を現はして侵入しますぞ。今日は肉體の高姫では御座いませぬぞ。改めて、カールさんに念押しておくから、後で刑法だの、民法だのと小言を云うて下さるなや」と云ひ乍ら、奥の間さして足音高くかけ込んだ。見れば松若彦の影もない。

「ハテ、どこへ隱れたか？」

と言ひつゝ、窓をガラリと開けて外面を眺むれば、松若彦は一生懸命、裏道を尻ひつからげて、どこかを指して走り行く姿が見えた。高姫は地團駄ふんで悔しがり

高姫『エ、卑怯未練な松若彦、彼奴を往生させねば此世はサッパリ泥海だ。千騎一騎の神界の御用だ』

と云ひ乍ら、裏口あけて松若彦が跡をトン〳〵〳〵と追つかけて行く。

（大正一一、八、二四、舊七、四、松村眞澄録）

第二章　灰猫婆（九一七）

カールは高姫の無遠慮にも奥の間にかけ込みしを怒り乍ら、自分も奥の間に到つて見れば、豈計らんや、松若彦、高姫の姿が見えない。ふと明け放つた窓より、外を覗き見れば、一丁許り距離を保つて、二人はマラソン競走の眞最中であつた。

カール『何とマア我の強い婆アだなア！　後追つかけて、引つ摑まえ散々に懲しめてやりたいは山々だが、俺が今ここを飛出せば、サッパリ不在となつて了ふ。あれ丈距離を保つて居る以上は、ヨモヤ追つ付きはせまい。其間に松若彦様はどつかへ隠れられるだらう。俺も臨時留守番に頼まれて來た上は、一刻の間も此家を空にしておく譯には行くまい。あゝ殘念だ……』

と呟き乍ら、玄關口に歸つて來た。そこへ慌だしく常彦、春彦の兩人、駈け來り

常彦『ヤア是はカールさんですか。一寸御尋ね致しますが、ウチの高姫さんは御越しにはなりませぬか？』

カール『ハイ、お越しか怒りか知りませぬが、隨分に妙な事が起りましたよ。今裏の廣道で、松の木と鷹とのマラソン競走が行はれてゐますワイ』

春彦『鷹は羽があつて、空中を翔るでせうが、松が走るとはチッと合點が往かぬぢやありませぬか』

カール『今日は餘りお目出たい日だから、山川草木皆踊り狂うて、喜んでゐます。私だつて、常彦……オットドッコイ、常の日とは違ひ、春彦……又違うた……春の花咲くやうな陽氣な氣になつて、勇んで居ります。常は尻の重い私でも、今日は何となしに、氣もカール、足もカールになりました。アハ、、、』

常彦『それはそうと、私方の大將、高姫さんは如何なりましたか？』

カール『どうも斯うも成りませぬワイ』

春彦『お出でになつたか、ならぬか、ハッキリ言つて下さいな』

カール『ハイ、お這入りになりまして、すぐ裏口から御出でになりました。大島が入口出口が元で、龍宮館が高天原と定まりたぞよ。アッハ、、、』

常彦『丸でキッネ彦が狐にだまされたやうな心持になつて來た』

カール『松若彦の世になるぞよ、末廣き末子姫、國依別命と今夜は、愈夫婦におなり遊ばすぞよ、靈と靈の因緣が寄合うて、此身魂は此身魂、あの身魂はあの身魂、此れとこれと夫婦、あれとあれと夫婦と、身魂の因緣性來を檢めて、結婚なく結

婚式が今晩は始まり、高砂や此浦舟に帆をあげてと云ふ所だアハ、、、。イヤもう目出たいの、目出たうないのつて、開闢以來の御目出たさだ……コレ常彦、春彦、御兩人さん、お前さんは何と心得ますか？」

常彦「本當に結構な事ですなア。併し乍ら結構だとは申されませぬワイ……なア春彦、一寸面倒いからなア」

カール「あなた方御兩人は、今度の結婚式が御氣に容らないのですか？」

常彦「イエ〳〵どうして〳〵、大贊成です。併し乍ら夜前も、夜中時分に高姫さんに叩き起され……お前の感想はどうだ……と尋ねられたので、國依別さんもエライ人だと思うて居つたが、ヤッパリ偉い御方だと、うつかり喋つた所、それは〳〵エライ權幕で大變な不機嫌でした。それから高姫さんは夜の明ける迄、一目も寢ず、奥の間でブツ〳〵と獨言を云つて、言依別がどうの、松若彦がどうのと、ハッキリは分らぬが、大變にこぼしてゐました。私も夜明け前になつてからグッと寢て了ひ、目をあけて見れば、高姫さんの御姿が見えない、コリヤ大方、松若彦樣の御宅へ出て來て、又もや生れつきの持病を起し、鉈理窟をこねて困らせてゐるに違ひない、こんな目出たい事にケチつけられてはたまらないから、何とか我々兩人が、高姫さんに出會つて、御意見を申したいとの一心から、手水もつかはず、朝飯も食はず、周章狼狽、取る物も取りあへずここ迄かけつけた次弟で御座いますワイ」

春彦「本當に困つたお婆アさんですワイナ。私も永らく自轉倒島からここまでついて來ましたが、それは〳〵隨分でしたよ」

カール「アハ、、、、隨分ジヤ〳〵馬ですなア。併し乍らあの儘にして置い目たら、此

出たい お日柄を目出たくない樣な事に潰して了ふか知りませぬから、コリヤ斯うしては居られますまい……常彦さん、お前さんはこゝの留守をしてゐて下さい。私は松若彦樣の跡を追つて行く、春彦さんは高姫さんの後を追つて行くと云ふ事にして

カール、春彦兩人が第二のマラソン競走をつゞけませうかい」

常彦「何分宜しう賴みますよ……カールさん、春彦さん、サア早く往つて下さい。キッと捨子姫樣か、言依別樣の御宅に間違ひないから……」

兩人は「合點だ！」と尻ひつからげ、裏口より大股に大地をドン〳〵と威喝させ乍ら、一生懸命に駈出した。

二人は二三丁許り駈出した。そこには横巾三間計りの深い川が流れてゐる。そうして丸木橋が架かつて居た。川は深い割には水は少く、殆ど向脛の半分計り沒する位な淺き流れであつた……ふと見れば一本橋は脆くも落され、高姫は川底に大の字となつて、フン伸びてゐる。これは松若彦が高姫の追ひ來るのを防がん爲に、臨時一本橋を落しておいたのである。高姫は頭を前にして、力一杯走つて來た其惰力で、俄に立ちまる事を得ず、止むを得ず、橋なき川と知り乍ら、落込んで了つたのであつた。

二人は

「ヤア、コリヤ大變だ！」

と辛うじて川に下りたち、高姫の人事不省となつてゐる體を引かたげ、高姫の臨時館へ送り屆け、いろ〳〵と介抱をし、祝詞を奏上し、鎭魂を施した。漸くにして高姫は息を吹き返し、あたりをキョロ〳〵眺めてゐる。

カール「モシ〳〵高姫さん、お氣がつきましたか？　大變な御危ないこつて御座りまし

た。マア〳〵私や春彦、兩人が、後から從いてゐたものだから、あなたの貴重な命が御助かり遊ばし、こんな目出たい事は御座いませぬワイ」

高姫「ハイ、それは有難う御座います……と御禮を申したら、お前さんのスッカリ惚にはまるだらうが、ヘンそうは往きませぬぞや。何だか後から人が突くやうに走つたと思うて居つたら、カールさん、お前は私の後を追つかけて來て、あの丸木橋の下へ突込んだのだな。此高姫だとて橋のない川を渡らうとするやうな馬鹿ぢやありませぬワ。何だか餘り後から突きよつたものだから、とう〳〵其勢ひに落込んで了つたのだ。あんな深い川へはまつたのが分つたと云ふのは怪しいだないか？　お前さん、松若彦さんの御贔屓をなさつて、私を突きはめたのだらう。オッホ、、、惡を企んでも、忽ち露はれませうがな」

春彦「高姫さん餘りぢやありませぬか？　現に私が證據人です。折角命を助けて貰ひ乍ら、何と云ふ無茶な事を仰有るのですか」

高姫「オッホ、、、、同じ穴の狐同志が同盟して、甘い事を仰有いますワイ。何程あの川の樣な深い企みをしても、智慧の流が淺いのだから、すぐと底が見ねましてなホッホ、、、」

カール「何とマア小面憎い婆アだなア。俺も最早愛想が盡きて來た」

高姫「そうだらう〳〵、小面憎い婆アで、愛憎がつきたものだから、つきおとしたのだな。カールは口から、吾れと我手に白狀しましたねエ」

春彦「アーア、モウ情ない……コレ、カールさん、どうぞ私に免じて、御腹が立つだらうが、怺へて下さいや」

高姫「コレ春さん怺へてくれと云ふのは、ソリヤ見當違ひやありませぬか。大それた日の出神の生宮……とも云ふべき、此高姫をこんな目に合せておいて、なぜ低頭平身、おわびをせないのか、チッと方角違ひぢやありませぬか」

春彦「知りませぬワイ。お前さんの様な疑ひの深い惡垂れ婆アさんは、今日限り絶交だ

カールさんに對して申譯がないから……人の命を助けてやつて、あやまらんならぬ法がどこにあるものか、おまけに我々がつきおとしたなどと、無理難題を云ふにも程がある」

高姫「謝罪らな、あやまらぬでよい。殺人未遂罪で告發するから其積りでゐなさいや」

カール「高姫さん、あなたは餘り俄にあんな所から轉倒なさつたものだから、精神が逆上してるのでせう。マア氣を落ち付けて、能く物の道理を考へて御覽なさい。私は是から御暇いたします」

高姫「ヘン、口と云ふものは重寶なものですなア。甘い事云つて逃げやうとしても、逃がしませぬぞや。人殺し奴が！」

春彦「エ、もう俺も勘忍袋の緒が切れた。假令天則違反になつても、カールさんに對して申譯がない、覺悟せい！」

と云ひ乍ら、其處にあつた木株の火鉢を取るより早く、高姫目がけてブチつけようとする。此時カールはあわてゝ

カール「ヤア春さん、まつた〳〵」

と拘きとめる。春彦は

春彦「オイ、カールさん、構うてくれな。おりやモウ死物狂だ」

と火鉢を兩手に、頭上高くふり上げた儘、目を怒らしてゐる。高姫は

高姫『ヘン、春の野郎、何をするのだ。そんな事でビクつく樣な高姫ぢやありませぬぞね。惡い事をした言譯のテレ隱しに、そんな狂言を、二人が腹を合せて、やつた所で計略の奥の奥まで、チヤンと見ねすいた高姫、そんな威喝は駄目ですよ。オホ、ヽヽ』

春彦益々怒り、

春彦『モウ了見ならぬ』

と高姫の頭に投げつけやうとする。カールは力一杯春彦の捧げた兩手を握つてとめやうとする。火鉢はいつの間にか、ひつくり返り、三人の頭の上は灰だらけになり、眞黑けの灰猫となつて、目も見ねぬ儘に金切聲を張り上げ掴み合うてゐる。此所へ詞もしづかに

『御免なさい』

と云ひ乍ら、門口の戸を開けて入り來る一人の立派な男があつた。是は言依別命である。

（大正一一、八、二四、舊七、四、松村眞澄錄）

第三章　言靈停止（九一八）

言依別　命は此灰まぶれ騒動を一目見て、顔をしかめ乍ら、

言依別「モシ高姫さん、言依別で御座います。コリヤまあ如何なさいました。カールさんに春彦さん、お前さんも灰まぶれぢやないか」

カール「ハイ、さつぱり灰猫婆に灰を吹かれまして、イヤもう此通り、ハイ北ハイ陣の爲體で御座います、ハイもうさつぱり、さハイが付きませぬワイ。どうぞ御ハイ慮下さいませぬ樣に、ハイ願致します」

春彦「紅塵萬丈……でなくて、サツパリハイ塵萬丈な目に會ひました。ハイ神樂の舞を一つ舞うて見ましたが、何分爺になる役が、ハイカラですもんだから、サツパリ釆ハイをふり損つて、灰猫婆アさんに咬つかれました」

言依別「何だか知らぬが、大變な喧嘩をしたと見ますな。……高姫さん、コリヤ一体如何して斯んな事が突發したのですか？　何か深い事情があるでせう。御差支なくば其理由を拜聽したいものですな」

高姫「あのマア言さんの白々しい事ワイの。甘く兩人に言ひ含ませ、此婆アをこんな目に合はしておいて、ヘン、そん計略は最早駄目ですよ。良い加減にお前さんも改心をなさいませ。ドハイカラ奴が！……」

言依別「コレハ〳〵、思ひ掛なき高姫樣の御言葉……」

高姫「思ひがけないでせう。それ丈死際の惡い高姫とは、いかなお前さんでも思ひがけなかつたでせう、ホツホヽヽヽ。憎まれ子世に覇張る……とか申しましてな、折角

國依別が甘くドハイカラの言さんに取込み、今晩は男蝶女蝶の花の盃酌かはす段取り迄、やう〳〵漕ぎつけた所、諸行無常の世の中、月に村雲、花に嵐の高姫婆アさん風が、情なくも吹きすさみ、半開の莟を散らさうとする。其防禦網を……否網所か、妨害を根絶せんと甘く企んだ、お前さんの御手際、實に見上げたもので御座いますワイ。オッホ、、、。何程琉の玉や球の玉を手に入れたと云つて、琉球相にして居つても、肝腎の身魂が曇り切り、灰泥の様になつて居つては、玉の効用はサッパリ玉無しですよ」

春彦「コラ灰猫婆ア！　貴様は比諭方のない惡垂れ婆アだ。改心をしたり、慢心をしたりモウ是から先は何をするのだ。疑心暗鬼の張本人奴が！」

高姫「改心慢心の後は感心だよ。お前達のどこ迄も執念深い計略には、此高姫も實に感心……否寒心せざるを得ませぬワイ。オッホ、、、」

と云つた限り「ウーン」と反り返り、癲癇の様に口から泡を吹き、手足をビリ〳〵と震はせて、其場に踏ん伸びて了つた。

春彦「餘り逆理窟許りを云ふものだから、神様の神罰が當つて、此通りふん伸びて了つたのだ。……なアカールさん、善と惡とを立分ける神は、此世に確に居られますねえ」

言依別「オイお前達、そんな事言つてゐる時ぢやない。早く灰を掃除して、顏を洗ひ、手を清め、高姫さんの御快復を祈らなならないぢやないか」

春彦「言依別様、こんな婆アは見せしめの爲に、斯うやつて冷たくなる所迄放つといてやつたら如何でせう。實に怪しからん奴ですから、又呼び生かしてやるものなら、

それこそ反對に團子理窟を捏ね、殺人未遂犯で告訴するの何のと、命助けて貰うた恩人に向つて、仇を返すのですから、幸ひ、自分が勝手に死んだのですから、こんな厄介者はモウ放つといたらごうでせうなア。カールさんに對しても、實に私としては助けてやつて呉れとは申されませぬワイ」

カール「そんな御氣遣ひは要りませぬ。サア早く御病氣全快の御祈念を致しませう」

と門先を流れる小川に飛込み、身をきよめ、一生懸命に、病氣恢復の祈願をこめ始めた。

言依別　命は天の數歌を歌ひ上げ、反魂の神術を修して居る。春彦も止むを得ず、身を清め一生懸命に祈願をこめた。漸くにして高姫は息吹き返し、目をキヨロつかせ乍ら、三人の姿をマンジリともせずに打眺めてゐる。

言依別「高姫様、御氣がつきましたか？　大變に心配を致しましたよ」

高姫は耳は聞ゐるが、まだ言靈の活用を許されてゐなかつた。蠶の蛹か、芋虫の如うに面をふくらし、ブリンと體を振つて、脊中を向けて、……甘い事を言うて呉れな。そんな上手追從は嗅ひませぬぞ……といふ意思を表示して居る。春彦は又もや高姫の前にまはり

春彦「高姫さん、御氣分は如何ですかな」

と尋ぬれば、又もブリンと脊中を向ける。カールも亦前に寄つて、

カール「高姫さん、良い加減に疑を晴らし、御機嫌を直されては如何ですか？　餘り執拗過ぎるぢやありませぬか」

と顏を覗けば、又もやブリンと脊中を向ける。三人の挨拶を一人々々、弓張はぢきで

もする樣にあちらへ向き此方へ向き、恰度、操り人形の樣に同じ所に尻を卸した儀、右に左に回轉して居る。

言依別命は言靈の使用を神樣より止められて居る事を悟り、又もや天の數歌を歌つて、言語の自由に發し得る樣と祈願をこめた。されど何故か容易に言靈を發射することが出來なかつた。言依別はカールを從へ、目禮し乍ら、春彥に介抱を命じ置き館を指して歸り行く。

（大正一一、八、二六、舊七、四、松村眞澄錄）

第四章　樂茶苦（九一九）

夜の明けぬ前から捨子姫は、末子姫の結婚の用意に取掛り、相當に繁忙を極めて居た。そこへ松若彥は慌ただしく走り來り、案内を請うた。高公は玄關にて其用事の趣を聞き、直ちに捨子姫の居間に通した。

捨子「松若彥樣、慌だしきあなたの御樣子、何か變事が、出來したので御座いますか？」

松若彥は息を喘ませ乍ら

松若「今日は誠に以てお目出たう存じます。さて只今私の館へ高姫さんが御出でになり大變な權幕で御座いました。要するに今度の結婚をジヤミにせうとの熱心な車輪的

運動を行つて居られます。私も言依別命様より昨夜大体を承はつて居りましたので、これはキッと其問題に違ないと思つてゐますと、果して私が只一口……ウン……と云つて、首を縦にふりさへすれば、萬事解決のつく話だと言はれましたので、コリャ大變、今となつて水を注されては、素盞嗚大神様始め、末子姫様に對し、申譯がない、辯舌の巧な高姫さんに對して議論をして居つても、追つ付かない、取り合はぬが奥の手と、裏口から逃げて參りました。あと振返り見れば、高姫さんは髪ふり亂し、夜叉の様な勢ひで、私のあとを追つかけて來ます。私は幸ひ、一本橋を落しておいて、高姫さんの進路を遮り、漸く茲までかけつけました。何れ、後程御宅へお出でになるでせうから、それ迄にトックリとあなたと御相談を遂げ、姫様にも斷乎たる決心を持つて頂きたいと存じまして、御邪魔を致しました次第で御座いま

す」

捨子「あゝ左様で御座いましたか。それは大變御心配をおかけ申しました。姫様の方に於ては夜前より、言依別命様と私が、及ばず乍ら、いろ〳〵と申上げ、今の處では挺でも棒でも動かぬ様な固い御決心で御座いますから、假令高姫さんが何と云はう共、最早ビクとも動きませぬ。安心して下さいませ」

松若「それを聞いて私も一寸安心致しました。併し乍ら、こんなゴテ〳〵した事が、肝腎の國依別さんの耳へでも這入らうものなら、淡泊な人だから……エゝもう斯んなゴテ〳〵した緣談なら眞平だ……と首を横にふられたが最後、吾々は大神様に對して、申譯が御座いませぬから、夫れが第一心配で御座います」

捨子「國依別さんも妾が夜前ソッと高公を伴れ、訪問致し、いろ〳〵と御意見を承はは

りましたが、高姫さんの混ぜつ返しについて、少し許り、うるさがつてゐられました。併し乍ら今度はどうしても、大神様の思し召だから、否む譯には行かぬ……と仰有つて固い〳〵決心が見ゑました。これも一つ御安心下さいませ」

斯かる所へ、言依別命は只一人現はれ來り、高公を案内させ乍ら、ツカ〳〵と奥に入り、

言依「ヤア松若彦さん、ここでしたか、良い所でお目にかかりました……捨子姫様、御忙しい事で御座いませうなア」

松若「つい今の先、參つた所で御座います」

捨子「何と云つても、お目出たい事で御座います。あなたも此事に就て御奔走遊ばし、さぞ御心遣ひの程御察し申上げます」

言依「時に松若彦さん……高姫さんの事ですが、俄に病氣が起り、一旦は人事不省に陥られましたが、我々初め、カール、春彦兩人の祈願に依りて、漸く息を吹き返されました。併し乍ら言靈が停止されて了ひ、何を言つても御答へなく、目計り、パチつかせ、體をブリン〳〵と振つて許りゐられます。何れ今夜の御結婚がお氣に入らないのでせうが、此事許りは如何あつても、高姫さんの御意見計り、用ゐる事は出來ませぬから、飽く迄も此盛典を完全に成功させたいと思つて、あなたの御宅へ御訪ねした所、常彦さんが留守をして居り、大方捨子姫様の御宅へ御出でになつたのだらうとの事、それ故御邪魔を致しました様な次第で御座います」

松若「何と云つても、最早動かすことは出來ませぬ。サア是から御殿へ上りまして、一切の準備に取掛りませう」

言依『左様ならば、捨子姫さま松若彦様、取急ぎ參りませう』
と立出でんとする所へ、高姫は髪ふり亂し、玄關口に立塞がり、何時の間にか言霊の停止は解除されて
高姫『言依別命、松若彦、捨子姫殿用が御座る。早く此門あけて下さい！』
と嗾鳴り立てゝゐる。後よりカール、春彦の二人は慌だしく、走り來り、漸く玄關先で追ひ付き、胸を撫で卸してゐる。
言依別命外二人は、高姫の聲を聞き、又うるさい、やつて來よつたなア……と口には云はねど、互の顏の色に表はし乍ら、松若彦は表の戸を開き
松若『高姫さん、今日は取込んで居りますので、どうぞ御歸り下さいませ。又明日ゆつくりとお目にかかりませう』

高姫『又しても妾を邪魔者扱ひにして、門前拂ひを食はす積りですか。言に捨の兩人も此處に居られるでせう。何程忙しいか知りませぬが、今晩のことよりわけて、きまりつけねば、此儘に捨子姫と云ふ譯にも參りませぬぞや。各自が氣を付けて、姫樣の此結婚は末の末子姫迄、考へて上げねば、あつたら娘をドブ壺へおとすやうなことを致しましたら、それこそ瑞の御霊樣へ、あなた方の言ひ譯が立ちますまいぞや此高姫も第一申譯が立ちませぬからなア。妾の言ふ事はどうで御氣には容りますまいが、ここは一つ大雅量を出して老人の云ふ事も取上げて貰ひませぬと、後に至つて臍を嚙むとも、及ばない、困つた事になりますぞや』
松若『そんな玄關口で、見つともない、どうぞ奥へ御通り下さい』
高姫『通れと云はなくても、通らなおきますか。妾の云ふ事が通らねば、通る所迄通し

て見せます。桃李物云はずと云ふ事がある。此高姫が通りたら最後、物言ひなしに私の意見を通して下さい。お前さん方は寄つてたかつて、とり〴〵の小田原評定許りに日を暮して御座るが、何を云つても、雪と炭、月と鼈程身魂の違ふ、此縁談がどうして纏まりませう。チット胸に手を當て、後先を考へて御覽なさい。誠に神様を侮辱すると云うても、これ位甚だしい事は御座いますまい。誰も彼も末子姫様の御機嫌をとる事計り考へて、御身の上の大事と云ふ事を、一寸も構はないから己むを得ず、年の老つた高姫が又してもく、出馬せねばならぬ樣な事が、出來て來るのだ」

カール「高姫さん、そらそうですワイ。お前さんは三五教の元老株だから、こういふ時にや飛んで出るのが當り前だらう。内閣組織の時でも、いつも元老が飛出すだないか。併し乍ら、立憲政體の今日、元老の飛出しは時代錯誤だとか何とか云つて、隨分國民が小言を云うてゐますよ。モウいゝ加減にお前さんも目をつぶつておとなしくしたら、如何ですか。日進月歩の今日餘り古い事をふりまはされると、時代に順應すると云ふ神策が行はれなくなり、此ウヅの國は今日の文明から樫子扱をされる樣になつて了ひますよ」

高姫「お默り召され……カール口か何そのようにベラ〳〵と、こんな所へ出しやばる幕じやありませぬぞ。私は言依別樣、其外の立派な方々に御意見に來たのだ。コンマ以下の御前さんが、此大問題に對して、何嘴を尖らすのだい」

カール「これだから、あの儘にしておいたが、宜かつたのだ。言依別さまを途中迄御送りすると……オイ、カールお前は高姫の言靈が利く樣に、マ一度引返し、ウ、アヒ

二聲言靈を唱へてやれ、そしたら自由自在に口が利けるやうになるから……と氣の良い言依別樣が仰有つたものだから、此奴ア今物言はしたら、面倒だと思ひ乍ら、敎主の命令背くに由なく、引返して物を言ふ樣にしてやれば、すぐ此れだから困つて了ふ。どうぞマ一遍、とめる工夫はあるまいかな」

と首を振つてゐる。

高姫「ヘン、御構ひ遊ばすなや。高姫は生れついてから啞ちや御座いませぬぞや。言靈は天地の神樣から授かつて居ります。とめられるものなら、とめて御覽なさい。妾が物言はなかつたのは餘りむかつくから、言はぬは言ふにいや優ると、ブリン〳〵と身振りで妾の意志を表示してゐたのだよ。何も御前さんのウ……ア……なんて、アタ阿呆らしい、そんな言靈で物が云へたなぞと、餘り、ヘン、見違ひをして貰ひますまいかなア。あゝドレ〳〵何時迄も門立ち藝者の樣に、玄關口に立ちはたかつて、言靈の發射も氣が利きませぬワイ」

と云ひ乍ら、奥の間に主人顏して、ドンとすわり込み

高姫「松若彥さん、今朝程は大きに御世話になりました。ヨウまアあんな深い河へおとして下さいまして、誠に高姫も空中滑走の味を覺ゑ、愉快なこつて御座りました。ホ、、、、。人を呪へば穴二つですよ。お前さんもシツカリなさらぬと、何時ドブへはまるか分りませぬぞや……コレ捨子姫さん、お前さんに一つ言ひたい事がある」

捨子「ハイ、何事か存じませぬが、承はりませう」

高姫「お前さんも大抵私が何しに來た位は、云はいでも御分りになつてゐるでせう。今高姫が茶々入れに來るから、腹帶をしめねばならぬと、三人が三人云ひ合はして御

座つたでせう。併し乍ら、能く考へて御覽なさい。あの國依別と云ふ男、若い時から親子兄弟散り〳〵バラ〳〵となり、碌に教育も受けず、乞食の樣にうろつきまはり、少し大きくなると、女たらしの後家倒し、婆婆弱らせの家潰しをやつて來た如何にも斯うにも仕方のない代物を、此頃球の玉とかの神力を受けたと云つて、御勿体ない素盞嗚尊樣の大切な御娘子、末子姫樣の婿にせうなぞとは、地異天變、天地轉倒の行方と申さねばなりますまい。是までお前さんは何時も末子姫樣の近侍を勤めてゐた關係上、主人が大事と思ふ誠があれば、國依別の欠點を包まず隱さずさらけ出して、愛想をつかさせ、此緣談を破約なさるやうに仕向けるのが、お前さんの誠だ。本當に姫樣を大事と思召すなら、早く御異見を遊ばして、やめさせて下さい。年が老つた高姫がワザ〳〵ここへ訪問したのも其爲ですから、どうぞ高姫のこへ來たことが無駄足にならぬ樣に賴みますよ……なァ捨子姫さん、お前さんは餘り身魂が良過ぎて、移り易いから、言依別さんや松若彦に甘く抱き込まれ、どう〳〵末子姫樣の御心を動かしたのぢやありませぬかなァ！

捨子「ハイ妾が第一、大賛成で御話を持ちかけたので御座います。そうすると言依別樣は、松若彦樣、龍國別樣初め、肝腎の末子姫樣が、夫れは〳〵御愉快相な御顏でニコ〳〵とお笑ひ遊ばし……捨子姫、何事もそなたに御任せするから、宜しう賴むよ……と耻かし相に仰有いました。それで妾が氣を利かし、相手方の國依別樣へも極力運動いたし、ヤッとの事で纏まつた此緣談、何程高姫樣が水を御注し遊ばしても最早ビクとも動かす事は出來なくなつて居ります。御注意御親切は有難う御座いますが、今度はモウ仕方がないと御諦め下さいませ。肝腎の御本人同志が、ニコ〳〵

で居られるなり、大神様は特に御喜びなり、どうして今日になつて之を轉覆さすことが出來ませうか」

高姫「エ、そこ迄モウ固い決心が出來て、若い方同志が思ひ合うて御座るのを動かさうと云つたつて動きますまい。殘念乍ら、モウ高姫も贊成いたしま……せうかい、就いては、貴女も御存じの通り、大神様の教には一汁一菜との定めで御座いますから決して御馳走はしてはなりませぬぞや。上から贅澤な鑑を出すと、人民が皆それに傚ひ、世の中が不經濟になつて來ましては、神様に又もや御心配をかけなくてはなりませぬからなア」

松若「何程軍備縮少、經費節約の流行する世の中だとて、一生一代の結婚に其樣なケチな事が、如何して出來ませうか、そんな時代遲れのインドレランスな事を言ふと、人が馬鹿にしますよ。それ相當の身分に應じて御馳走もせねばなりますまい。お酒もドッサリ皆さんに呑つて頂き、底抜騒ぎをやつて、面白可笑しく御祝をする方がどれ丈け素盞嗚大神様が御喜び遊ばすかも知れませぬ。又吾々も大變に御喜びですからな。アハ、、、」

高姫「私の云ふ事が頑迷だと仰有るのですか、何程新しいのが流行る時節だと云つて、神様の教迄背いてすると云ふ事は、一つ考へ物でせう」

言依「高姫さんの御言葉も御尤もです。松若彦さんの御意見も強ち棄てる譯にも行きますまい。そこは身分相應と云ふ事に致しまして、正中を取り、餘りケチつかず、餘り奢らずといふ程度に、今晩の結婚を無事に、幾久しく祝ひ納めるやうにしたら如何でせう」

高姫「そんなら私も我を折つて言依別様にお任せ致します。又空中滑走さゝれたり、言靈を停止さゝれたり、灰猫婆アにせられるも困りますから、憎まれないやうにおとなしう改心しておきませう」

言依「有難う」

松若「安心致しました」

捨子「お目出たう御座います」

カール「面白うなつて來ました」

春彦「今晩は御馳走で、ドッサリと酔はして貰ひませう。何より彼より上戸の春彦、一番にお目出たいワ、有難いワ、アハ、、、、」

（大正一一、八、二六、蒲七、四、松村眞澄録）

第二篇　鶴亀躍動（一六五）

第五章　神　壽　言（九二〇）

末子姫、國依別の結婚問題も、高姫の不同意的了解を得て、漸く取行はるゝことゝなつた。珍の舘の大廣前に於て神壇を設け、言依別命は齋主となり、松若彦、龍國別は其他の神務に奉仕し、茲に芽出度く、神前結婚の祭典は濟んだ。愈直會の宴に移り、十二分の歡喜を盡し、各歌を唄ひ、舞ひ、踊りなどして、今日の慶事を祝することゝなつた。

言依別命は恭しく神殿に拜禮し、禮服を着けたる儘、聲淑やかに歌ひ始めた。

言依別命『仰げば高し久方の
　天の八重雲かき分けて

筑紫の日向の立花の
青木ケ原に天降りまし
撞の御柱巡り合ひ
妹脊の契を結びたる
神伊邪諾大御神
神伊邪冊大御神
其古事に神ならひ
瑞の御靈と現れませる
神素盞嗚大神の
御子とあれます末子姫

心の色も紅の
誠一つの神司
珍の御國に天降りまし
神の教を楯となし
四方の民草安らかに
治め玉ひし功績は
皇大神の御心に
叶へまつれるものぞかし
三五教の神司
言依別は自凝の

秀妻の國を後にして
心も清き宣傳使
國依別と諸共に
神の教を開かんと
波かき分けてテルの國
高砂島に名も高き
テル山峠を乗越にて
ウヅの都に來て見れば
五風十雨の序よく
五穀は稔り果物は

豐に熟する神の國
あゝ惟神々々
神の惠の幸はひて
末子の姫の御神力
月日と共に輝きぬ
かゝる折しも素盞嗚の
神尊ははるゝと
ウブスナ峠のイソ館
立出で茲に來りまし
末子の姫に巡り會ひ

喜び勇み玉ふ折
言依別の伴ひし
國依別を見そなはし
末子の姫の夫となし
此神國を守れよと
宣らせ玉ひし尊さよ
言依別は畏みて
松若彦や捨子姫
其外數多の人々に
皇大神の言の葉を

宣べ傳ふれば悉く
喜び勇み此度の
慶事をあなゝひ玉ひけり。
あゝ惟神々々
結びの神の引合せ
魂と魂との睦び合ひ
魂の納まる肉宮に
尊卑高下はありとても
その源を尋ぬれば
同じ御神の分靈

時世時節につれられて
高くも生れ又低く
生るゝ事は神界の
幽玄微妙の御經綸
靈魂と靈魂の系統を分け
清く結びし此縁
千代も八千代も限りなく
高砂島のいつ迄も
榮に盡きせぬ松の世の
色も褪せざれ永久に

波も靜かに二柱
鴛鴦の衾の暖かに
浮びて進む和田の原
深きは民の心かな
深きは神の御惠みぞ
月日は清く明かに
空澄み渡る今日の宵
心も勇み身も勇み
此慶びは茲よりは
外へはやらじと眞心を

神の御前に誓ひつゝ
嬉しみ尊み祝ぎまつる
嬉しみ尊み祝ぎまつる」

と歌ひ終り、元の座に着座した。松若彦は立上り、銀扇を開いて祝歌を歌ひ且つ自ら舞うて見せた。

松若彦「豐葦原の瑞穂國
隈なく巡り救ひます
末の御子と生れませる
浮瀬に沈みて惱み居る
三五教の宣傳使
島の八十島八十の國
神素盞嗚大神の
末子の姫のくはし女に
世人を普く救ひ行く
國依別の神司
汐の八百路を打渡り
現はし玉ひて今こゝに
神素盞嗚大神の
末子の姫と妹と背の
天津御空に照りわたる
星の影さへキラ〳〵と
天祥地瑞の吉祥日
齋主となりて神前に
いよ〳〵茲に妹と背の
此神國を守ります
奇しき功績を遠近に
ウヅの都に出で玉ひ
御言畏みまし〳〵て
契を結ぶ今日の宵
日影は明かく月清く
いつもに變る空の色
言依別の神司
結婚式を擧行し
道を結びて永久に
今日は始めとなりにけり

いよ〳〵是よりウヅ館　月日並びて皎々と
輝き玉ふ高砂の　常磐の御世となりぬべし
あゝ惟神々々　松若彦が眞心を
述べて芽出度き今日の日を　壽ぎまつり瑞御靈
神素盞嗚大神の　千代の齢を祈りつゝ
夫婦が幸を皇神の　御前に祈り奉る
旭は照る共曇る共　月は盈つ共虧くる共
國依別や末子姫　さかし女くはし夫相並び
現はれゐます上からは　高砂島は何時迄も
珍の御國と稱へられ　、常世の春の永久に
花咲きみだれ鳥歌ひ　山川清く風清く
野は青々と茂り合ひ　青人草は大空の
星の如くに生み殖らて　榮に久しき松の世の
嬉しき姿を瑞御靈　神の御前に言靈の
清き限りを捧げつゝ　畏み〳〵願ぎまつる
畏み〳〵願ぎまつる」

と歌ひ了つて、座に着いた。捨子の姫は立上り、銀扇を開いて、自ら歌ひ、自ら舞ひ今日の慶事を祝ぎまつゝた。其歌

捨子姫「久方の高天原を出でまして　四方の國々巡りまし
八岐大蛇や醜神の　伊猛り狂ひ民草を

苦しめ惱ます曲津見を
生言靈の神力に
百の惱みを嘗め玉ひ
凝りて成るてふ島々を
露をば與へ玉ひつゝ
高天原の空清く
波に泛べる國土は
三千世界の萬有は
仕へまつれる尊さよ
珍の御子と生れませる

仁慈無限の大神は
言向和し玉ひつゝ
心も辛き汐沫の
巡らせ玉ひ御惠の
草木も靡く御威勢に
大海原の底あかく
清くさやけく茂り合ひ
君の威德を畏みて
かゝる目出度き大神の
八人乙女の末子姫

年端も行かぬ中よりも
神の誠の御惠みを
うるほはせんと思召し
バラモン教の鬼雲彦が
醜の魔人の惟神
待たせ玉へる折柄に
鬼雲彦は逸早く
末子の姫は是非もなく
流れも清きエデン川
開かせ玉ふ折もあれ

神の御爲世の爲に
草の片葉に至る迄
天恩郷に現れまして
館に入らせ玉ひつゝ
誠の道に服從ふを
太玉神の現れまして
雲を起して逃げ去りぬ
姉の命と諸共に
渡りて四方に神の道
鬼雲彦が部下共に

嗅ぎつけられて妾まで
乗せてすゞなく和田の原
神素盞嗚大神の
受けさせ玉ふ末子姫
妾の心を勵ませつ
かひくぐりつゝ漸くに
ハラの港に上陸し
御靈の力を現はしつ
石熊、カールの兩人を
登りつ下りつ人々の
牢朽たる釣舟に
つき放されし苦しさよ
雄々しき清き靈をば
少しも驚き玉はずて
荒波猛る海原を
神の御稜威もテルの國
テル山峠を乗越ゐて
バラモン教の神司
言向和せ急坂を
命を狙ふ曲神を

稜威の言靈宣り玉ひ
神の館に出でましぬ
茲に現はれ來る身の
國の司となり玉ひ
三五教の神司
雲霧分けて降りまし
教を開き玉ひしが
瑞の御靈は捨子姫
アマゾン河に向ひたる
危難を救ひ言靈の
言向和してウヅの國
妾も姫に從ひて
嬉しさ樂しさ如何許り
世人を導き玉ふ折
言依別の神人が
茲に止まり玉ひつゝ
神素盞嗚大神の
此現身にかゝらせて
鷹依姫や高姫の
御稜威に百の曲神を

言向和せと宣り玉ふ
其神言を畏みて
從へ都を立出でて
アマゾン河を見おろして
國依別の宣傳使
四人の伴を從へつ
琉と球との寶玉の
アマゾン河の南北に
醜の曲津を射てらせば
鷹依姫や高姫も
言依別の神人は
時を移さず伴人を
帽子ケ岳に向ひまし
含笑み玉ふ折柄に
仕組の糸に引かされて
茲に登りて來ましける。
御稜威に充てる兩人は
展開したる森林の
神の御稜威は目のあたり
光りを慕ひて屏風山

帽子ケ岳に集まりぬ
負はせ玉へる宣傳使
ウヅの都に現れまして
幾久しくも末永く
實にも尊き限りなれ。
神素盞嗚大神は
これの慶事に臨みまし
依さし玉へる有難さ
神の惠は目のあたり
やう〳〵心もおちつきて
かくも尊き神德を
國依別の眞人が
末子の姫の夫となり
契結ばせ玉ふこそ
加之瑞御靈
遠く波路を打わたり
親子夫婦の契をば
あゝ惟神々〳〵
永く仕へし捨子姫
雪積む山の冬の木の

花咲く春に會ふ心地　　あゝ惟神々々
結ぶの神のいつ迄も　　二人の仲は睦じく
變ることなくまし〳〵て　　神の御稜威も高砂の
尾の上の松の色深く　　千年の鶴の末永く
龜の齢の萬世も　　いと平けく安らけく
鎭まりゐませ二柱　　捨子の姫は今よりは
尙も心を勵まして　　力の續く其限り
誠一つを楯となし　　神と君とに仕へなむ
あゝ惟神々々　　御靈幸はひましませよ」

と歌ひ了り、悠々として我座に着いた。

（大正一一・八、二六、舊七、四、松村眞澄錄）

天津日の光も强くさしのぼり
　巖に松のしげる御代かな
海中の浪に打たるゝ岩のごと
　ます〳〵かたき大和魂

第六章　皮肉歌（九二一）

高姫は立上り、祝歌を唄ひ始めた。其歌、

高姫『天の岩戸の始めより　女ならでは夜が明けぬ
國と稱へし神の國　女にかけては抜目なき
國依別の神司　宗彦お勝の昔より
凄い腕をば持つてゐた　此世の案れた行方を
自由自在に振りまはし　名を轟かし來りけり
さはさり乍ら三五の　尊き神の御教に
心の底より改心し　生れ赤兒になりたれど
未だ安心する所へ　私としては行きませぬ
さはさり乍ら瑞御靈　神素盞嗚大神の
清き尊き思召し　末子の姫の御心に
叶へまつりし果報者　國依別の宣傳使
玉かこつけに高姫を　瑞の御靈の現れませる
竹生の島迄はる〳〵と　使はし玉ひし御神力
誠に感じ奉る　あゝ惟神々々
神に任せて高姫は　モウ此上は何事も
此緣談に關しては　申し上げぬと定めました
コレ〳〵國依別さんは　お前は元より氣樂者

からかひ上手の生れ付き　是からチッとは村肝の
心の駒を立直し　早く眞面目になりなされ
アルゼンチンの神館　神の柱と國の君
重荷を負うたお前さん　どうぞ確乎しておくれ
親子は一世夫婦二世　主從三世といふ掟
お前の夫婦は二世三世　五世や六世ぢや御座るまい
天地の規則にてらしなば　これ程違反な人はない
さはさり乍ら　惟神　瑞の御靈の　贖ひに
此世を造りし神直日　心も廣き　大直日
只何事も人の罪　直日に見直し　聞直し

宜り直されて宗彦の　成れの果てなる宣傳使
國依別は不思議にも　水晶無垢の御靈なる
末子の姫と結婚し　高き位に上りつめ
普く世人に臨むとは　どこで算用が違うたかと
私は合點が行きませぬ　國依別の神さんよ
憎いことをば高姫が　吐すと思うたら違うぞい
モウ是からは謹んで　末子の姫を尊んで
外の女に目をくれず　妻大明神と崇めたて
大事に〳〵仕へませ　又も持病が再發し
手當り次第に手を出して　姫の心を惱ますな

これ〳〵末子のお姫さん　國依別と云ふ人は
私が只今云ふたよに　油斷のならぬ色男
朝な夕なの起伏しに　氣を付けなされ婢女を
側におくなら不器量な　おかめの樣な女をば
きつと侍らせおきなされ　中々油斷がなりませぬ、
これ高姫が老婆心　お道を思ひ國思ひ
お前を大事と思ふ故　日の出神の生宮が
オツトドツコイコラ違うた、　日の出の勢ひ大空に
輝き亘る增鏡　心に映つた誠をば
鏡にかへて進ぜませう　あゝ惟神々〳〵

神素盞嗚大神の　貴の御前憚らず
申上げたる高姫の　苦き言葉を神直日
心も廣き大直日　見直しませよ大神よ
言依別の敎主さん　捨子の姫の侍女さん
松若彦の司さん　此高姫が云うたこと
キツと忘れちやなりませぬ　正月言葉は誰も好く
人の嫌がる言靈を　並べて云ふのも心より
皆を大事と思ふゆへ　無調法してからゴテ〳〵と
意見したとて仕樣がない　前つ〳〵に氣を付ける
神が表に現はれて　善と惡とを立別ける

日の出神は明かに　　鏡の如く善惡を
心の底より照りわたし　　おさばきなさる神樣よ
一度に開く木の花の　　今日の目出たき宴席に
皆さんたちの喜ばぬ　　苦い言靈御馳走に
私は並べておきました、　　こんな粗末な品物と
只一口にけなさずに　　能く味はうてたべてたべ
苦い言葉は胃の藥　　靈の藥になりますぞ
クスリ〳〵と片隅に　　笑うて御座る人がある
お前は何が夫程に　　可笑しう御座るか石熊さん
お前の名前は固けれど　　心の中は反對に

國依別の亞流だらう　　同氣同心相求め
同病互に憐れむは　　天地の道理と聞くからは
今日は目出たい席ぢや故　　餘り咎めはしませぬが
モウ是からは晴れの場で　　こんな不都合があつたなら
高姫承知をしませぬぞ　　皆さん奇妙な顏付で
穴があく程わしの顏　　眺めて御座るが氣が知れぬ
あゝ豆鐵砲を鳩鳥が　　くらつたやうなお顏付
何を心配なされます　　目出たく式も濟みたれば
皆さん互に打とけて　　心の底をさらけ出し
此高姫の云ふ通り　　國依別の身の爲に

氣をつけなさるが誠ぞね　あゝ惟神々々
餘り永らく言靈を　使うと皆さん欠伸して
あゝゝゝゝゝ言ひなさる　ホンに醜いお顏付
アフンと致して御座るのか　折角あいた其口が
寒がらぬ樣な顏をして　五百羅漢の陳列場
さながら眺むる如くなり　あゝ惟神々々
お氣にいらないこと計り　ベン〳〵だら　と述べ立てゝ
お心もませて濟みませぬ　此高姫は今日限り
國依別の事につき　一切萬事申さない
國依別の神さんよ　どうぞ安心なさいませ
是ぢやに依つて平常の　其行ひが肝腎ぢや
まさかの時に人々の　前で耻をば晒されて
赤い顏をばせにやならぬ　皆さんこれが良い鑑
三五教の御教を　能つく守りて妹と脊の
夫婦の道を違へじと　愼み守るが宜しいぞ
あゝ惟神々々　惟神ぢやと思やこそ
私も今度の緣談を　神素盞嗚大神の
言葉に免じて口つめる　天津神達八百萬
國津神達八百萬　國魂神の龍世姫
神命の御前に　高姫祈り奉る

高姫祈り奉る」

と皮肉な歌を唄ひ、元の座にツーンとして、すはり込んだ。

（大正一一、八、二六、舊七、四、松村眞澄錄）

淺川の瀨々の流は高けれど
　深き和知川水音も無し
よく光る敎の林を照り分けて
　あまねく救ふ天津神國

瑞月

第七章　心の色（九二二）

鷹依姫は立上り、嬉しげに銀扇を開き、少し曲つた腰を伸ばせる樣な心持にて、おもなしく唄ひ始めた。

鷹依姫「常世の國の自在天
　神の敎を諾ひて　齋きまつりしバラモンの
　自凝島に打わたり　此上なきものと思ひつめ
　高春山にたてこもり　アルブス敎と銘打つて
　敎を傳ふる折柄に　テ、カ、二人を司とし
　神の司の方々が　思ひがけなき三五の
　　言靈戰を開くべく

登り來ませし其時に
巡り會うたる嬉しさよ
龍國別や玉治別の
お初の姫と諸共に
教を諭し玉ひつゝ
朝な夕なに神の前
黒姫樣が預りし
いつの間にやら紛失し
ヤッサモッサと修羅もやし
詰めよせ玉ふ恐ろしさ

龍國別の我怜
國依別の神樣は
教司や杢助さん
いと懇ろに三五の
錦の宮に伴れ歸り
使はせ玉ひし嬉しさよ
黄金の玉ははしなくも
黒姫さんが驚いて
吾等親子を疑ひて
此事忽ち高姫の

耳に聞いて親と子は
言ひつけられて是非もなく
いろ〳〵雑多と憂苦勞
誠の道を心より
二人と共にアマゾンの
時雨の森に立向ひ
神の御言を宣べ傳ふ
玉の力を身に受けし
國依別の神人が
アルゼンチンの都迄

黄金の玉の捜索を
高砂島にふみ迷ひ
嘗めたる御かげに神樣の
怪りて親子はテ、カ、の
速瀬を渡りて空を敲ふ
獣の王となりすまし
時しもあれや琉球の
言依別の神司
吾等一同を救ひ上げ
伴ひ玉ひ歸りける。

吾等親子は勇み立ち　　來りて見れば末子姫
神素盞嗚大神の　　茲に現はれまし〳〵て
御稜威をてらさせ玉ひつゝ　　大恩受けし國依別の
神の命に末子姫　　千代の契を今日の宵
結ばせ玉ふと聞きしより　　心も勇み氣も勇み
有難涙にくれました　　國依別の神樣よ
末子の姫を末永く　　いつくしみつゝウヅの國
ウヅの館に永久に　　鎭まりゐまして世の人を
安きに導き玉へかし　　あゝ　惟神　々〳〵
尊き神の御惠を　　感謝しまつり妹と脊の

身も健かに幸かれと　　國治立大御神
豐國姫大御神　　其外百の神達の
御前に祈り奉る　　あゝ　惟神　々〳〵
御靈幸はひましませよ」

と唄ひ了つて、重き體をゆすり乍ら、元の座に着いた。龍國別は立上り、銀扇を開いて、自ら歌ひ、自ら舞ふ。

龍國別『高姫さんや黒姫の　　鋭き眼に睨まれて
思はぬ嫌疑をうけ乍ら　　親子は悲しき旅の空
自凝島を後にして　　荒波猛ける海原を
命カラ〴〵渡り來て　　高砂島に上陸し

鏡の池に居を構へ
心の鬼に責られて
スタ〳〵登り下りつゝ
ポプラの蔭にて皇神の
かゝぶり茲に親と子は
廣野を渉り海を越ね
アマゾン河の森林に
言依別や國依別の
光りにてらされ屏風山
茲に一行十八の

親子二人が玉搜し
夜陰に紛れてアリナ山
アルゼンチンの荒野原
清き尊き御教
始めて迷ひの夢もさめ
艱難辛苦の其果ては
兎の王の神となり
教司の神人が
帽子ケ岳に攀登り
身魂と共にやう〳〵に

ウヅの都に來て見れば
捨子の姫と諸共に
吾等親子は朝夕に
仕へまつれる折もあれ
神素盞嗚大神は
ひに温き言の葉を
自凝島をあちこちと
いとも親しき道の友
球の御玉の光りもて
司となりて末子姫

思ひ掛けなき末子姫
降りゐますぞ有難き
神の惠を嬉しみて
救ひの神とたよりたる
又もや茲に天降りまし
下させ玉ふ尊さよ
手を引合うて巡りたる
國依別の神司
ウヅの御國の神柱
妻に持たせつ永久に

鎭まり玉ふ妹と背の　今日の御式を親と子が
心の底より感激し　祝ひ奉るぞ嬉しけれ
國依別よ若草の　妻の命と末永く
鴛鴦の衾の夢さめず　身も健かに榮にませ
あゝ　惟神々々　神の惠みは目の前り
現はれますぞ尊けれ　現はれますぞ尊けれ』

と極めて簡單なる歌なれども、龍國別が國依別に對する友情のこもりあるに、何れも感歎せざる者はなかつた。石熊は立上り、銀扇を開いて、自ら歌ひ自ら舞ふ。

石熊『高照山の山麓に　バラモン教の神舘
太しく廣く立て並べ　朝な夕なに大國彥の
神の命の神靈を　齋きまつりて諸人を
教へ導きゐたりしが　アルゼンチンのウヅ都
三五教の勢ひは　瓏の豐榮昇る如
四方に輝きわたりしを　心の中の曲者に
そゝのかされていろ〳〵と　神の大道のさまたげを
致せし事の耻かしさ　乾の瀧にあらはれて
命危き所をば　末子の姫に助けられ
巽の池に向ひ立ち　足を痛めていろ〳〵と
惱む折柄側近く　添ひて仕へしカールさんが
心配りの神德に　足の病も癒やされて

心も勇み身も躍り
教の花は日に月に
かゝる所へ三五の
言依別の出でましに
上下睦びて惟神
神素盞嗚大神の
アマゾン河に向ひたる
司を救ひて逸早く
宜らせ玉ひし神言に
吾等四人を従へて
ウヅの都に來て見れば
梅花の如く薫りける
錦の宮の大教主
再び喜悅の花は咲き
教を傳ふる折もあれ
いと嚴かな神懸り
鷹依姫や高姫の
珍の都に歸れよと
言依別の大教主
帽子ケ岳に向ひまし

めでたく凱旋なし玉ひ
瑞の尊は日月の
天降ります尊さよ
集まり玉ふ珍館
妹背の契を月清き
其嬉しさに石熊も
深き仕組を拜察し
誠を捧げまつりつゝ
誓ひて仕へ奉る
神の御靈の幸はひて
歸りて見れば素盞嗚神の
御空に輝く御姿
斯くも尊き神人の
國依別や末子姫
今宵の空に結びます
皇大神の底知れぬ
心の限り身の限り
天地百の神達に
あゝ惟神々々
心濁れる石熊を

千代に八千代に永久に　使はせ玉へ國依別の
神の命や末子姫　珍の御前に願ぎまつる
あゝ惟神々々　御靈幸はひましませよ』

（大正一一、八、二六、舊七、四、松村眞澄錄）

第八章　春

駒（九二三）

春彦は立上り、祝意を表し、謠ひ始めた。

春彦『高姫さんのお伴して　秋津の島を春彦が
いとなつかしき故里を　御靈のふゆをかかぶりて
教を四方にしき島の　大和男の子の益良夫が
常彦さんと只二人　瀬戸の海をば船出して
艪櫂をこぎつゝ渡り來る　浪高姫の御權幕
荒き汐路を打ちわたり　船を暗礁にのり上げて
高島丸の船長の　タルチルさんに助けられ

波高砂の島の端
金剛不壞の如意寶珠
尋ねんものと言依別の
鏡の池に立向ひ
アマゾン河を始めとし
モールバンドに出會し
言依別の神さまが
四人のお方と諸共に
鰐の架橋打ちわたり
鷹依姫の一行と

テルの港に安着し
其他の玉の所在をば
瑞の命の跡逐うて
いろ〳〵雜多と身をこがし
時雨の森のまん中で
震ひ戰く折柄に
使はし玉ひし神司
大森林をくぐりぬけ
兎の都に立向ひ
帽子ケ岳の靈光を

合圖に漸く登りつめ
國依別の神司
偕老同穴永久に
其事きまりて高姫は
自ら心を濁しつゝ
遂には深き川に落ち
つきおとしたと逆理窟
又もや館にかつがれて
相も變らぬ毒々しい
カール春彥腹を立て

目出度く茲につきにけり
末子の姫の夫となり
妹脊の道を結びます
身魂が濁つた濁らぬと
あちら此方とかけ巡り
命を助けて貰ひつゝ
呆れ果てたる計りなり
歸つて息を吹返し
憎まれ口を叩きつゝ
目を釣り合うてゐたりしが

私は腹が忽ちに　有合ふ火鉢を手にさゝげ
高姫目がけて投げつける　覺悟した時カールさん
待て〳〵暫し待て暫し　そんな亂暴はやめておけ
何ぢやかんぢやと引止める　火鉢は忽ち墜落し
そこらあたりが灰まぶれ　高姫さんは知らぬ間に
灰猫婆さんとなりました　灰にまみれた三人が
ヤッサモッサの最中に　言依別の神さんが
表戸あけて入り來り　いろ〳〵雜多と言わけて
諭し玉へど高姫は　俄に啞の眞似をして
プリン〳〵と身をまはす　芋葉に止まつた芋虫か

蠢の蛹の虫のよに　頭をふつたり尻をふり
御機嫌惡いお顏付　忽ち捨子の姫さんの
館をさして駈出す　こりやたまらぬと春彦は
カールの司と諸共に　後追つかけて往て見れば
フルナの辯の高姫も　言依別や捨子姫
二人の御方の言靈に　何時の間にやら降伏し
いや〳〵乍ら承諾し　ホンに目出たいお目出たい
今宵は私も參りませう　何かお祝しませうと
立派に〳〵言はしやつた　何を御祝ひなさるかと
片唾を呑んで見て居れば　言はいでもよい事のみ言はい

國依別のアラ搜し　こんな目出たい宴席で
ケチをつけるも程がある　意地くわ惡い婆さんぢやと
私は腹が立ちました　外の時なら此儘に
私は放かしちやおきませぬ　さは去り乍ら今日の日は
誠に芽出たいお日柄ぢや　喧嘩をしては濟まないと
今迄きばつて居たけれど　腹の虫奴が承知せぬ
實に呆れたお婆アさん　皆さん定めて高姫の
あの歌聞いたら腹が立たう　何程腹が立つとても
今宵許りは許しやんせ　朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも　假令大地は沈むとも

あれ丈ねぢれた魂が　どうして元へ歸らうか
曲つた劍は如何しても　元の鞘には納まらぬ
一べんあつい火にかけて　きつい重たい向う槌
ドッサリ加へて打ち直し　燒及を入れねば仕方ない
曲り切つたる魂が　如何して元へ返るやら
何程眞直な杖でさへ　水にひたして眺むれば
必ず曲つて見にまする　瑞の御靈の御前で
曲つた心の魂を　ひたした所で如何してか
是が眞直に見にませうか　これ程分らぬ御方に
はるゞ〳〵從いて此處迄も　來た春彦と思はれちや

こんな人とは知らなんだ
あゝ　惟神　々々
高姫さんは此頃は
かゝつて御座ると宜り直し
皆さん許して下さんせ
此春彦が高姫に
あゝ　惟神　々々
申上げるは濟まないが
副守護神が承知せぬ
ベラ〳〵喋つた此私
誠に〳〵耻かしい
呆れて物が言へませぬ
直日に見直し聞直し
神經過敏のヒステリに
今迄加へた御無禮を
お伴についてやつて來た
代つてお詫を致します
こんな事をば此席で
私の體に憑つたる
止むを得ずして惡口を
天津神達國津神
此過ちを平けく
どうぞお赦しなさりませ
末子の姫と睦まじう
神の御爲世の爲に
春彦茲に眞心を
あゝ　惟神　々々
國魂神さん春彦の
見直しまして今日丈は
國依別の神さんよ
生き永らへていつ迄も
どうぞ盡して下さんせ
こめて御願ひ致します
御靈幸はひましませよ」

テーリスタンは立上り、歌ひ始めた。其歌

テーリス　「自轉倒島の中心地
高春山に現はれし
鷹依姫に從うて
テーリスタンやカーリンス

左守右守の神となり
高姫黒姫兩人が
茲に二人が同志打
手段を以て兩人を
金剛不壞の如意寶珠
國依別の一行が
不思議の緣で吾々は
錦の宮の側近き
仕へ居る折黃金の
高姫さんに追ひ出され
羽振を利かしてゐる所
天の森迄やつて來て
其機を伺ひいろ〳〵と
岩窟の中へ押込めて
喉から吐かそと思ふ中
ここに現はれまし〳〵て
三五教に入信し
黑姫館に身を托し
玉の紛失事件より
カーリンスと諸共に
大海原を漂ひつ
神の司に巡り會ひ
島にやう〳〵安着し
玉の所在を尋ねつゝ
兎の玉の神となり
高姫一行八人は
無事でおまめでお達者で
こんな挨拶そこ〳〵に
天津祝詞を宣り乍ら
今日の花形役者なる
鷹依姫や龍國別の
四人揃うて高砂の
いろ〳〵雜多と氣を配り
時雨の森の森林に
月日を送る折柄に
のそ〳〵そこへやつて來た
目出たい事で御座います
かはす間もなく一行は
帽子ケ岳に立向ひ
國依別の神さんに

ベッタリ出會うて勇み立ち　言依別の敎主等と
十八人の一行は　ウヅの都へ歸りけり
思ひがけなき末子姫　神素盞嗚尊まで
茲に現はれゐますとは　私は夢にも知らなんだ
あゝ　惟神々々　神の御稜威の表はれて
國依別の神司　末子の姫と合衾の
目出たき式をあげ玉ふ　此宴席に侍りて
神酒、神饌、御水は云ふも更　海河山野種々の
珍物をば　あてがはれ　謠ひつ舞ひつ勇ましく
千歳壽ほぐ嬉しさよ　あゝ　惟神々々

御靈幸はひまし〳〵て　放り出されたる高姫さんに
又もや茲でいろ〳〵の　妙なお歌を聞かされて
私は感心〳〵と　頭をかたげて居りました
感心したと申すのは　意地くね惡い高姫の
負ず嫌ひの魂に　本當に呆れた事ですよ
あゝ　惟神々々　こんな目出たい席上で
高姫さんとの爭ひを　したくはなけれど後の爲
高姫さんの戒めに　一寸意見を述べました
思へば畏き神の前　末子の姫の御前も
憚りませぬ無作法を　何卒許して下さんせ

テーリスタンが眞心を　こめて御願致します
言依別の神司　其他一同の方々よ
互に心を協せつゝ　打寛ろいで酒肴
ドッサリよばれて舞ひ踊り　千秋萬歳萬々歳
世は高砂の何時迄も　榮に〳〵て後の世の
礎固くつきかため　これの目出たい宴席を
仇に流さずいつ迄も　心に刻みて喜びませう
あゝ　惟神〳〵々々　神の御前にほぎまつる
神の御前に祝ぎまつる」

（大正一一、八、二六、舊七、四、松村眞澄錄）

第九章　言靈結（九二四）

カールは立上り唄ひ始めた、

カール『吾等が信ずる三五の
神素盞嗚大神の
姿優しき末子姫
靈に備へましませる
いよ〳〵婚禮の式を擧げ
萬代までも變らじと
其神業ぞ尊けれ
神の司とましませる
珍の御子と現はれし
古今無双の神力を
國依別の神さんと
こゝに目出たく千代八千代
妹背の道を契ります
此御慶事を高姫が

イントレランスな事を言ひ　四方八方駈け巡り
いろ〳〵雑多と氣をいらち　水晶御靈の生粋の
瑞の御靈の姫さんに　女殺しの後家倒し
婆嫗なやめの家つぶし　棒でも挺でもゆかぬ人
國依別を夫として　結婚なんかをさしたなら
アルゼンチンの神國は　地異天變の大騒動
此世が濁つて常暗の　泥の世界となるだらう
此縁談は如何しても　水を注さねばおかないと
松若彦の館迄　目をつり上げて立向ひ
一言二言熱ふけば　松若彦は逸早く

背戸口あけてトン〳〵と　かけ出し玉へば高姫は
阿修羅の如く暴れ狂ひ　髪ふりみだし追うて行く
マラソン競走の烈しさよ　松若彦は丸木橋
力に任して打おとし　ヤッと胸をば撫で乍ら
捨子の姫の館迄　息せき切つて逃げて行く
勢餘つて高姫は　高い土手から墜落し
大の字畫がく川の底　後追つかけし兩人が
打驚いて高姫を　息をふかせて助けやり
コレ〳〵もうし高姫さん　危ないことで御座つたと
いと親切におとなへば　高姫さんは喜ぶと

思ひの外の逆理窟　　こんなお方にいつ迄も
相手になつちや日が暮れる　さはさり乍ら此まゝに
放かしておきもなるまいと　カール、春彦兩人は
婆さんを擠いでエーく〳〵と　舘に送り屆くれば
口を極めて又しても　罵り出す面にくさ
春彦腹にすゑかねて　忽ち火鉢を引つ掴み
ヤッサモッサの其結果　三人の男女は灰まぶれ
鎬を削る折もあれ　言依別の神さんが
御訪ねなすつた其爲に　喧嘩は漸く納まつた
高姫さんは腹を立て　物をも言はず一散に
捨子の姫のお舘に　夜叉の如くに飛んで行く
春彦、カールの兩人は　御無禮の事をさせまいと
後からついてゐて見れば　始めの勢ひどこへやら
龍頭蛇尾の高姫が　手持無沙汰の御顏付
時の勢ひやむを得ず　一度は我をば折りつれど
胸くそ惡さにたつた今　こんな目出たい席上で
けたいな事を言ひよつた　口がカールか知らね共
これが默つて居られよか　後日の爲に言うておく
三五教の高姫よ　お前も五十の坂越して
ヤンチャ小僧の言ふ樣な　バカな理窟はやめなされ

お前の御器量がさがるぞに　金剛不壞の如意寶珠
其外麻邇の寶玉が　お前を嫌うて逃げ出して
隱れて了うたも無理はない　玉でなうても此私が
お前の顏を見る度に　隱れ度いようになつてくる
心一つの持樣で　數多の人に愛せられ
又憎まれる世の中ぢや　高姫さんよ高姫よ
私は決してこんな事　大勢の中で言あげて
耻をかゝそた思はない　お前の末が案じられ
心の底から嫌なこと　忍んで言うておきまする
心直してドさんせ　決してお前を憎いとは
一度も思ふたことはない　憎いと思ふたら言ひはせぬ
お前が可愛い許りに　苦いことをばべら〳〵と
喋らにやならぬ身の因果　推量なさつて下さんせ
天地の神も御照覽　遊ばしまして此カールが
清き心の奥底を　高姫さんの眞心に
何卒映させ玉へかし　あゝ　惟神　々々
神の御靈の幸はひて　今日の喜び永久に
變らであれや高砂の　松の千歲の色深く
茂り榮にてウヅの國　神の大道も彌廣く
敎の德はどこ迄も　科戸の風の草や木を

言靈結

靡かす如く開けかし　あゝ、惟神々々
神の御前に願ぎまつる　神の御前に祝ぎまつる」

常彦は立上り、唄ひ始めた。

常彦「高姫さんの神司
眞人の後を追ひかけて　言依別や國依の
常彦、春彦兩人を　高砂島に渡らんと
琉球の島で泡をふき　伴ひまして出で玉ふ
高島丸に救はれて　大海原で船を割り
吾等二人をふりすて、　やう〳〵來るテルの國
木蔭にかくれて獨言　邪魔者扱なされつゝ
聞いたる時の腹立たさ

高姫さんは水臭い　こんな所迄伴れて來て
二人をまこうとは餘りぢや　こんな御方と知つたなら
ついて來るのぢやなかつたに　後悔しても是非がない
再び途中に出會して　鏡の池に立向ひ
架橋御殿に擔がれて　又もや命を助けられ
憎まれ口を叩きつゝ　愛想をつかされ舘をば
駈出しアリナの山を越に　アルゼンチンの荒野原
ポプラの下で木の花の　神の化身に巡り會ひ
そこでスツカリ改心を　遊ばしまして川渡り
原野を越にて海の上　アマゾン河の北の森

鷹依姫を助けんと　　果てしも知らぬ林をば
さまよひ巡りてモールバンド　大怪物に出會はし
震ひ戦く最中に　　帽子ケ岳より照り來る
琉と球との霊光に　　漸く命を助けられ
南の森に打わたり　　鷹依姫の一行と
帽子ケ岳の頂上で　　言依別や國依別の
大神人に巡り會ひ　　ウヅの館に立向ひ
末子の姫と國依別の　　神の命の結婚を
聞いて忽ち腹を立て　　系統の身魂を鼻にかけ
言依別の教主をば　　目下の如く言ひこなし

國依別や其外の　　幹部の方をば訪問し
いろ〳〵雑多と邪魔したが　　どう〳〵結局にや我を折つて
此宴席に列せられ　　歌を唄うて下さつた
さはさり乍ら皆の人　　意地くね悪い高姫と
決して思うて下さるな　　高姫さんの眞心は
大神様の道思ひ　　此世を思ふ許りに
あんな事をば言うたのだ　　私は永らくついて居て
高姫さんの腹の中　　眞澄の鏡にうつす如
よつく存じて居りまする　　こんな事をば申したら
お氣に入らぬか知らね共　　此常彦は中立で

公平無私の言靈を　皆樣方の御前に
おめず憶せず述べまする　あゝ　惟神　々々
御靈幸はひまし〳〵て　直日に見直し聞直し
高姫樣は一心で　誠一つの塊で
あんな事をば言ふのだと　心も廣き大直日
宜り直しませ方々よ　常彥茲に高姫の
心の中を代表し　誓つて述べておきまする
決して間違いないことを　あゝ　惟神　々々
御靈幸はひまし〳〵て　國依別の神司
末子の姫と合衾の　目出たき式を擧げ玉ふ
何卒〳〵末永う　ウヅの都に止りて
神の御稜威を輝かし　世人を安く平けく
守らせ玉へ　惟神　神の御前に願ぎまつる
神の御前に祝ぎまつる」

（大正一一、八、二六、舊七、四、松村眞澄録）

第一〇章　神歌（九二五）

神素盞嗚大神が末子姫の婚姻を祝し玉ふ御歌

神素盞嗚尊『八雲立つ出雲八重垣妻ごみに
八重垣造る其八重垣を
神代の昔高天原にて
日の大御神神伊邪諾尊
月の大御神神伊邪册尊
自轉倒島におり立ちて
天敎山の中腹に
撞の御柱つき固め
左右りと巡り會ひ
あなにやし好男
あなにやし好乙女よと
宜らせ玉ひて妹と脊の
婚嫁の道を開き玉ひし
其古事に神傚ひ
三五敎の神司
心も清き國依別命
瑞の御靈の末の子と

鶴龜躍動

神の依さしの末子姫
今日の佳き日の吉き時に
妹脊の契永久に
結び終へたる芽出たさよ
朝日は照るとも曇るとも
月は盈つとも虧くるとも
假令天地は變るとも
國依別と末子姫
夫婦の契は永久に
變らざらまし高砂の

松の緑の色深く
鶴の齡の千代八千代
龜の齡の萬世も
變らであれや 惟神
皇大神の御前に
瑞の御靈の神柱
神素盞嗚尊
畏み〳〵願ぎまつる
あゝ 惟神 々々
御靈幸はひまし〳〵て

三五教の神司
言依別命を始めとし
松若彦や高姫や
鷹依姫や龍國別
其外百の神司
信徒達に至るまで
今日の吉き日の吉き時を
喜びまつり集ひ來る
其眞心の麗しさ
心の色はまち〳〵に

高姫の如變れ共
神の大道と世の爲に
盡す心は皆一つ
一つ心に睦びあひ
神の心を推し量り
堅磐常磐に神の代の
柱となれよ礎と
なりて盡せよ惟神
神は汝と共にあり
清き畏き眞心に

鶴亀躍動

鏡まりゐます月と日の
神の恵は目のあたり
立ちさやぎたる荒波の
早なぎわたる和田の原
深き恵の底知れず
高き恵みは天の原
限り知られぬ青雲の
廣く高きは皇神の
大御心ぞ永遠に
變らず動かず眞心を

捧げて祈れ能く祈れ
大國治立大御神
高皇産靈大御神
神皇産靈大御神
天照らします大御神
國治立大御神
豐國主大御神
其他百の神達の
深き恵を畏みて
千代も八千代も永久に

大御前に能く仕へ
五六七の御世の末迄も
清き心を濁らすな
あゝ　惟神々々
神に誓ひて今日の日を
喜び敬ひ行先の
夫婦の幸を壽ぎつ
神の司や信徒や
國人達に　惟神
神の心を誓ひおく

あゝ　惟神々々
御靈幸はひましませよ」

と歌ひ終り、欣然として其儘奥殿に神姿を隠し給ふのであつた。

（大正一一、八、二七、養七、五、松村眞澄謹）

第二章　波　靜（九二六）

高姫は再び立つて、尊の御歌に感じ、懺悔的の歌を謠ひ、此度は自ら手を拍つて舞ひ狂ひ、心の底より打解けて見せた。其歌

高姫『變性男子の腹をかり　生れ出でたる高姫は
知らず〳〵に高ぶりて　八岐大蛇の曲靈に
何時の間にかは欺かれ　疑心暗鬼の雲蔽ひ
心の空は烏羽玉の　全く暗となりにけり
神素盞嗚大神の　清き尊き御心
少しも悟らずいろ〳〵と　力限りに妨害し
其神業を遲らせし　深き罪をも咎めずに
許させ玉ひし瑞御靈　深き仁慈を目のあたり
拜みまつりて高姫も　心の駒を立直し
始めて開く胸の暗　あゝ　惟神　々々
神の水火より生れたる　人は七轉八起てふ
坂を越ゆべきものなるに　神の大道にさやりたる
其罪科も悟らずに　いろ〳〵雜多と身をいらち
心を曇らせ玉の緒の　生命危き境遇に
出會ひし事も幾度か　七死八生の關を經て
漸く茲に着きにけり　金剛不壞の如意寶珠

黄金の玉や紫の　玉を始めて麻遲寶珠
あらゆる寶を吾れの手に　納めて功績を誇らんと
いらちし事の耻かしさ　それのみならず國依別の
教司の此度の　慶事を手もなく覆さんと
思ひ餘つて眞心の　梶取り外し曲津見の
醜の虜となり果てゝ　いろ〳〵雜多と動きたる
其行ひの耻かしさ　あゝ　惟神　々々
神の心に宜り直し　見直しまして高姫が
心の罪を赦せかし　言依別の神司
松若彦を始めとし　鷹依姫や龍國別の
珍の命や石熊の　教の司の御前に
謹み敬ひわびまつる　かくも悟りし高姫は
いよ〳〵今日より愼みて　我情我慢を放擲し
尊き神の御柱と　成りて仕へん人々よ
心さかしき高姫と　さげすみまさず手を引いて
神の御爲世の爲に　功績を立てさせ玉へかし
あゝ　惟神　々々　神の御前に願ぎまつる」

と歌ひ終り、元の座に着いた。

國依別命は立つて歌ひ舞ふ。

國依別「仰げば高し久方の　神の惠みをかゝぶりて

松鷹彦の子と生れ　天の岩戸の閉されし
それの騒ぎに親と子は　風に木の葉の散る如く
ちり〳〵バッと散りみだれ　暗にさまよふ幼兒の
我兄弟も白雲の　遠き國路へさすらひの
悲しき身とはなりにけり　あゝ惟神々〳〵
かゝる情なき兄弟も　神の惠の幸はひて
戀しき父に巡り會ひ　兄妹の所在をば
始めて悟る胸の内　天の岩戸も一時に
開き初めたる如くなり　三五教の大道に
救ひ上げられ宗彦は　言依別の教主より

名さへ尊き宣傳使　國依別と任けられて
主一無適の信仰を　深く心に刻みつゝ
東や西や北南　遠き近きの隔てなく
海と陸との分ちなく　神の御爲世の爲に
力の限り盡せしが　思ひ掛けなき今日の空
月日は清く照りわたり　星の光はキラ〳〵と
輝きわたる尊さよ　神素盞嗚大神の
珍の御子と生れませる　末子の姫と今日よりは
千歳を契る妹と背の　鴛鴦の衾の新枕
千代も八千代も變りなく　皇大神の御惠みと

三五敎の神司　信徒たちは言ふも更
高姫司の御恵みに　今日は嬉しき此宴會
天津神達國津神　百神たちの御守りに
笑み榮に行く高砂の　島根に青き一つ松
緑の色もこまやかに　五六七の御世の末子姫
幾千代迄も睦まじく　神の舘に止まりて
敎を開き國人を　いと安らけく平けく
守らせ玉へ　惟神　畏み〳〵願ぎまつる
畏み〳〵願ぎまつる」

末子姫は三十一文字を以て、言靈の歌をよみ、國依別の歌に答へ、且つ其慶事を祝した。

末子姫『あら尊といく千代迄もうごきなく
　えにし結びしおしの衾の
かけまくもきみの天降りしくになれば
　けはしき人のこころだになし
さしのぼるしののめの空すみ渡り
　せこのかんばせそゆる月影
たらちねのちち大神のつきの魂
　てらさせ玉ふとよの神國
ながかれとにしきの宮にぬかづきて

ねがふ心そのゝかなりけれ
はに安のひこの教のふかくして
へいわの風はほゞ〳〵にふく
ます鏡みがきすましてむつまじく
めをとの道をもも年もがな
やくも立つ「いづもの神のゆはせたる
えにしにあればよきもあしも
わかくさのゐもせの道のうるはしく
ゑらぎ〳〵てをくるうまし世」

と四十五音の折込み歌を謠ひ、悠々として國依別と共に、父大神の後々追ひ、奥殿に進み入る。これにていよ〳〵結婚祝賀の歌も濟み、一同歡を盡して、各自の館々へ立歸るのであつた。あゝ、惟神霊幸倍坐世。

次に捨子姫は、國依別、末子姫夫婦の媒酌に依り、これより一年の後松若彦の妻となり、國依別夫婦の部下に仕へて、偉功を立てたのである。

（大正一一、八、二七、舊七、五、松村眞澄筆）

第一二章　袂別（九二七）

神素盞嗚大神は言依別命、カールと共に珍の都を後にして、國依別夫婦を始め其他一同に送られ、天の鳥船に乘りて、空中高く羽ばたき勇ましく、フサの國イソの館を指して歸り玉ふことゝなつた。別れに臨み、大神は一同に左の歌を賜はつた。

神素盞嗚尊『天と地との中空を
　功績も高く身も高く
　心も廣く歸り行く
　イソの館へ欣々と
　言依別の神司
　カールを從へ三人連れ
　ウヅの都を今はしも
　別れに臨んで末子姫
　國依別や其外の
　百の司に宣べておく
　あゝ　惟神　々々
　神の惠のいや深く
　道の御稜威のいや尊く
　山川清く野は青き
　高砂島は神の國

尊き神の殊更に
選み玉ひし眞秀良塲ぞ
心を清め身を淨め
神の教を朝夕に
固く守りて三五の
道の光りを輝かし
青人草を悉く
恵の露にうるほはせ
千代も八千代も穏かに
治め玉へよ 惟神

神の司や信徒に
別れに臨んで宜べておく
あゝ 惟神 々々
御靈幸はひましませよ」

と歌ひ玉へば、國依別は直に立つて歌を唄ひ、大神に名殘を惜むのであつた。

國依別「四方の雲霧吹拂ひ
百の神人助けんと
盡させ玉ふ瑞御靈
神言を畏みウヅの國
末子の姫と諸共に
汚れを清め天地の
心を配り身を碎き
神素盞嗚大神の
神の司と選まれて
アルゼンチンを守りつゝ

三五教の御教を　　ウヅの御國は云ふも更
高砂島は尚愚　　常世の國の果て迄も
開き進めて大神の　　深き恵に酬ゐなむ
吾は卑しき身を以て　　尊き神の御裔なる
末子の姫の夫となり　　空しく月日を送る身の
うら耻かしき神司　　今より心を錬直し
千代に八千代に永久に　　皇大神の御教
あなゝひまつりうまし世を　　五六七の神世と開きなむ
あゝ大神の御恵み　　假令天地は變る共
いかで忘れむ神心　　心を平に安らかに

國依別や末子姫　　ウヅの館に御心を
配らせ玉はずすく〳〵に　　天津御空をかけらして
御國に歸らせ玉へかし　　あゝ惟神々々
親子夫婦の生別れ　　名殘は盡きじ雲の上
仰ぐも高し君の恩　　謹み感謝し奉る
あゝ惟神々々　　御靈幸はひましませよ」

茲に素盞嗚尊は再び天の鳥船に乘つて、天空高く歸り玉うた。末子の姫は空を打仰ぎ、歌を誦む。其歌、

末子姫「久方の天津御空を打仰ぎ
　かくれし後も眺めつるかな。

足乳根の父は雲井の空高く
　かけりて波斯に歸りましけり。
今暫し待たせ玉へと願ふ間も
　なく〳〵父は歸りましけり。
打仰ぎ眺めすかして大空の
　清きは父の心なる哉。
國依の別命と諸共に
　ウヅの館に清く仕へむ。
言依の別命の御姿を
　仰げば清し瑞御靈かも。

言依の神の命はいかにして
　珍の館を去りましにけむ。
才の花の神の命の分靈
　カールの司いとなつかしき哉。
大空を昇りつめたる鳥船は
　惠の露をふらしてぞ行く。
豐幸はふ神の惠を朝夕に
　忘れざらまし夫婦二人は。
天降り玉ひし父も今は早
　雲井の空にかくれましけり。

千早ふる神の造りしウヅの國
　高砂島の國の眞秀良場。
桃上の神の司の鎭まりし
　ウヅの神國殊にさやけき。
國彦の神の御裔の松若彦が
　盡す誠は神ぞ知るらむ。
高砂の尾の上に立てる松若彦の
　譽は千代に輝きやせむ。
惟神神の御前に慴れ伏して
　朝な夕なに國を守らむ。

數萬年歷史の末に夫と言ひ
　妻といふ者生れ來しかな。
垂乳根の親の惠を身に受けて
　ウヅの都に照りわたるかな。
旭さす夕日輝くウヅの國
　惠は殊に高砂の島。
國民のかまどの煙脈しく
　龍世の姫の惠算き。
アマゾンの河の魔神を言向けし
　言依別や國依別の神。

國依の別命の働きに
時雨の森は治まりにけり」

末子姫は三十一文字の歌を以て、名殘を惜み、或は述懷を述べなどして、茲に一同に會釋し、神殿指して進み入るのであつた。

龍國別は別れに臨み、三十一文字をよむ。其歌、

龍國別「靈幸はふ神の國依別れ〳〵に
龍國別の心悲しき。
神國を今龍國別の神司
母諸共に自凝島へ行く」

高姫の歌、

「高砂の千歳の松に今しばし
別れなむとす名殘惜しさよ。
遥々と海山越えてウヅの國
珍の身魂と吾れはなりぬる。
惟神　神の光りに照らされて
高姫胸も晴れわたりける。

素盞嗚神尊のゐます限り
世はおだやかに治まりて行く。
高砂の島に天降りし素盞嗚の
神尊ぞ尊かりけり。

國依別貴命の神司
　千代に八千代に御國守れよ。
大神の八人乙女の末子姫
　わけて清けき君の御姿。
松若の彦命の神司
　ウヅの館に永遠に仕へよ。
惟神神の御國を高姫が
　別れ惜みて神言を宣る」
鷹依姫も亦三十一文字を誦む。其歌。
「自凝の島より來る鷹依の

姫の司は今別れなむ。
これやこの行くも歸るも別れても
　神の惠に大本の道。
足曳の山を踏み越え川わたり
　海に浮びて神の道行く。
國依別貴命や末子姫
　幸多かれと朝夕祈る。
鷹依の神の司は珍の都
　別れんとして涙こぼるゝ。
惟神神の御爲道の爲

世人の爲に盡す眞心。

アマゾンの河の流れはさかしくも
神とわたればさかしくもなし。

アマゾンの時雨の森に鷹依の
姫の司は心殘りぬ。

月の神齋きまつりし兎の都
今は戀しくなりにけるかな。

黄金の玉の所在を探ねんと
求ぎ來りたる親子悲しも。

惟神 神の御前にひれ伏して

ウヅの館の幸を祈らむ。

見渡せば山川清く野は青し
天津御空は眞澄の鏡。

野も山も清くさやけき神國に
別れて歸る名殘惜しさよ。

自凝の島を立出で早三年
四年振にて錦の宮へ。

四尾の山の麓にそゝり立つ
錦の宮を遠く拜みつ。

素盞嗚神尊の御姿を

近く拜みし事の嬉しさ。
言依の別の命に巡り會ひ
男々しき姿見たる嬉しさ。
國依の別命よ今日よりは
心を配れ重荷負ふ身は。
入乙女の末子の姫の御館
今別れ行く心悲しき。
惟神神の恵の幸はひて
又會ふ春を待ちつゝぞ經む」
テーリスタンは覺束なげに歌を誦む。

テーリスタン「鷹依の姫の司に從ひて
玉を索めつ今茲にあり。
玉々と玉に心を奪はれて
今はたまらぬ悲しい別れ。
魂はどこかの空に宿替し
テーリスタンの魂無し男。
吾れも亦自凝島に立歸り
若草の妻持たんとぞ思ふ。
若草の妻の命と手をひいて
ウヅの都にいます芽出たさ。

神素盞嗚尊の御姿

伏し拜む時涙こぼれつ。

言依の別命は空高く

吾れを見棄てゝ去りましにけり。

カールさん二人の後に從ひて

身もカール〳〵と御空行くかな。

高姫も漸く心和らぎて

久方振りに笑ひ顏見る。

いと涼し風吹く島の神の國

後に見棄てゝ歸る惜しさよ。

黑姫の生命救ひし其爲に

高砂島に退はれにけり。

烏羽玉の心も黑き黑姫は

今や何處の空に彷徨ふ。

いつ迄も腰折歌は盡きざれど

神のまに〳〵とゞめおくなり」

カーリンスは又もや三十一文字を誦む。

カーリンス「カーリンス、テーリスタンと諸共に

涙の海に漂ひにけり。

高砂の島にやう〳〵渡り來て

玉搜しする時の苦しさ。
天祥の山の瀑布へ現はれて
モールバンドを言向け和しぬ。
言向けしモールバンドの功績は
カーリンスならで鷹依の姫。
龍國の別命の鼻高き
帽子ケ岳に登りゆくかな。
素盞嗚神尊を伏し拜み
身の置所知らぬ嬉しさ。
嬉しやと思ふ間もなく大神は

吾れを見すて歸りましけり。
高姫の司と共に海原を
渡ると思へば涙含まるゝ。
高姫よゝ　立直し
波太平洋に渡りましませ。
カーリンス是が一生の御願ぞ
波高姫よ心鎭めよ。
村肝の心の海に荒波の
龍國別よ暫し鎭まれ」
ヒロから出放題の歌を並べ、高姫、鷹依姫、龍國別、テーリスタン、カーリンス、常

彦の一行は、ウヅの都に別れを告げ、テル山峠をふみ越ゑ、ハラの港に出で、自凝島に向つて歸ることゝなつた。

（大正一一、八、二八、舊七、六、松村眞澄錄）

草鞋をば穿ちて歩む人々の
　跡に小判の足型がつく

瑞月

第三篇　時節到來（一六六）

第一三章　歸途（九二八）

アルゼンチンの神の國　都を後に龍國別や
鷹依姫や高姫や　テーリスタンやカーリンス
常彦一行六人は　國依別や末子姫
松若彦に送られて　互に前途を祝しつゝ
燒きつく如き炎天を　何とはなしに自轉倒の
島根に歸る嬉しさに　心も勇み足並も
いと輕さげに歸り行く　あゝ惟神〳〵々々
神の惠を蒙りて　玉に對する執着を

弊履の如く打棄てゝ　心の色もテル山の
峠の麓にさしかゝる　坂の麓の樟の森
茲に一夜の雨宿り　鳥の聲に起されて
細谷川に身を清め　携へ持てるパンを出し
朝餉をすまし膝栗毛　駒に鞭ち登り行く
岩石起伏の峻坂を　聞くも勇ましヨ三五の
教の道の宣傳歌　謠ひ〳〵て登り行く
足の運びもいつしかに　風吹きすさぶテル山の
峠にやう〳〵辿りつき　ここに一行六人は
一先づ足を休めける。

龍國別『皆さん、此涼しい風を浴び乍ら、暫く休息を致し、ウヅの國に別れを告げませうか』

一同『宜しからう』

と異議なく賛意を表し、荒き息を吐き出し乍ら、頂上に枝振面白く立つてゐる常磐木の蔭に腰を下し、息を休むる事となつた。

龍國別『この山は桃上彦命様がウヅの都に五月姫と鎭まりまして、神業にお仕へ遊ばした時、黄泉比良坂の戰ひに、大加牟津見命と現はれ玉へる松竹梅の姉妹が、宣傳使の初陣の時、ここ迄登つて來て、ウヅの都の空を打仰ぎ、袂別の歌を謠はれた名高い所です。末子姫様も、捨子姫、カール、石熊の三人を從へ、ここに暫く息を休め歌ひ謠つて、ウヅの都へ御越しになつた由緒の深き場所です。吾々も一つ何と

か各自に歌を謠つて、後世に傳へなくてはなりますまい。一つ高姫さん、貴女が此一行中の棟梁株だから、何とか歌つて聞かして下さいませぬか」

高姫「仰せ迄もなく、何か歌つて見ようと思つてゐた所です。こうせ俄作りの出放題だから笑つちや可けませぬよ」

と前置し、ウヅの都を瞰下し乍ら謠ひ始めた。

高姫「向うに見ゆるはウヅの國　アルゼンチンの神舘
　青野ケ原にピカ〳〵と　光り輝く白い壁
　國依別の神司　末子の姫と諸共に
　さぞ今頃は睦まじく　誰憚らず水入らず
　互に顔を見合して　ニタリ〳〵と惠比須顔
　さぞやさぞ〳〵お樂しみ　其有樣があり〳〵と
　目に見る樣に思はれる　あゝ惟神々々
　神の仕組か知らね共　此炎天をはる〴〵と
　喘ぎ〳〵て胸を突く　險しき坂を攀登り
　汗や脂を絞りつゝ　世人の爲に盡す身に
　比べて見れば雲泥の　實に相違があるものだ
　上に上ある世の中に　下に下ある世の中だ
　暑い涼しい言ひ乍ら　うちわは丸く末廣く
　扇を開いてバタ〳〵と　風を起しつ二人連れ
　治まり返つて御座るだろ　それに吾等は何として